

石 勺 遺 跡 IV

－ J 地 点 の 調 査 －

大野城市文化財調査報告書

－ 第 56 集 －

1 9 9 9

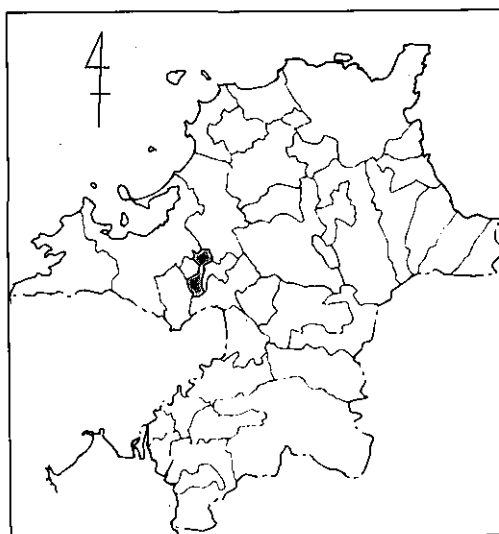
大野城市教育委員会

こく じゃく 石 勺 遺 跡 IV

－ J 地 点 の 調 査 －

大野城市文化財調査報告書

－ 第 56 集 －



1999

大野城市教育委員会



1号火葬墓出土藏骨器

序

石勺遺跡の報告書も今回で4冊目となりました。今回報告する奈良時代の火葬墓は大野城市で初めて見つかった貴重なものです。これまで石勺遺跡では弥生時代を中心に縄文時代晩期から鎌倉時代までの遺物が見つかっています。しかし、奈良時代の遺構・遺物はほとんどなく、この時代の人々の生活がどこで営まれていたのか不明な点が多くありました。今回の発見により、奈良時代にはこの地がおそらく僧侶や官人と考えられる人の墓所であることが分かりました。

近隣での奈良時代の火葬墓の発見例は、大宰府政庁周辺の丘陵上がほとんどで、水城跡を越えた地域での発見は初めてという事になります。大野城跡や水城跡など大宰府との関係は従来から言われていますが、今回の発見もまた大宰府との関連の深さを裏付けるものと考えております。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成11年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 堀 内 貞 夫

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が福岡県総務部厚生課の委託を受けて実施した石勺遺跡J地点発掘調査の調査報告書である。
2. 挿図中の方位は磁北を表す。
3. 遺構の実測・写真撮影は石木秀啓・丸尾博恵・武下里織が行った。
4. 遺物の撮影は岡紀久夫（埋蔵文化財技術研究会会員）氏による。
5. 遺物実測・製図・拓本は丸尾が行った。
6. 本書のⅣは石勺遺跡J地点出土土器の胎土分析について、奈良教育大学の三辻利一教授に分析を依頼し、玉稿を賜った。
7. 本書のⅤは石勺遺跡J地点出土人骨の分析について、九州大学の田中良之教授に分析を依頼し、玉稿を賜った。
8. 本書の執筆・編集は丸尾が行った。

調査にあたっては、下記の方々から多大なご助言を頂いた。記して感謝の意を申し上げたい。

（順不同、敬称略）

横田 義章（九州歴史資料館）

狭川 真一・山村 信榮・井上 信正・高橋 学（太宰府市教育委員会）

松川 博一・重松 俊彦（太宰府市文化ふれあい館）

本文目次

I はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
II 位置と環境	
1 周辺遺跡の概要	2
III 調査の結果	
1 調査概要	6
2 遺構と遺物	
(1) 火葬墓	6
(2) 溝	9
(3) ピット	10
(4) その他の遺構	10
(5) 風倒木痕	10
(6) その他の出土遺物	11
IV 石勺遺跡J地点1号墓出土須恵器の蛍光X線分析	12
V 石勺遺跡火葬墓出土人骨について	15
VI まとめ	17

巻頭カラー図版

1号火葬墓出土蔵骨器

図版目次

図版1 (1) 北東部完掘状況(南西から)①	(3) 1号火葬墓遺物出土状況(南東から)
(2) 北東部完掘状況(南西から)②	図版5 (1) 1号火葬墓完掘状況(南東から)
図版2 (1) 北西部完掘状況(南西から)①	(2) 1～3号溝完掘状況(南西から)
(2) 北西部完掘状況(南東から)②	(3) 3号溝埋土土層(南西から)
図版3 (1) 南部完掘状況(北東から)	図版6 出土遺物
(2) 1号火葬墓蔵骨器出土状況(南東から)	図版7 1号火葬墓出土人骨1
図版4 (1) 1号火葬墓埋土土層(南東から)	図版8 1号火葬墓出土人骨2
(2) 1号火葬墓火葬骨出土状況(南東から)	

挿図目次

図1 石勺遺跡と周辺の主な遺跡	4
図2 石勺遺跡の調査箇所	5
図3 J地点遺構配置図(1/350)	7

図 4	1号火葬墓実測図 (1/40)	8
図 5	1号火葬墓出土土器実測図 (1/3)	8
図 6	S D01・02・03土層実測図 (1/20)	9
図 7	S P16・S X07・S X36出土土器実測図 (1/3)	9
図 8	S X01・S X03・S X04出土土器実測図 (1/2)	10
図 9	その他の出土土器実測図 (1/3)	11
図10	その他の出土土製品実測図 (1/2)	11
図11	牛頸窯群出土須恵器のK-Ca分布図	14
図12	牛頸窯群出土須恵器のRb-Sr分布図	14
図13	有蓋短頸壺の両分布図	14
図14	牛頸窯跡群出土須恵器編年表 (1/6)	折り込み
図15	牛頸窯跡群出土須恵器編年表 (1/6)	折り込み
図16	宮ノ本遺跡・唐人塚遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	23
図17	結ヶ浦・花見ヶ丘・米喰・峯火葬墓蔵骨器実測図 汐井掛遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	24
図18	大迫遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況21・24・51号は1/80、 23号は1/60、52・2次1号は1/30、38・45・58号は1/20・実測図は1/6)	25
図19	大迫遺跡・永浦遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/60・実測図は1/6)	26
図20	池の上墳墓群火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	27
図21	池の上墳墓群・都地原遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	28
図22	西谷火葬墓群火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	29
図23	広幡城遺跡・白岩遺跡・中桑野遺跡・茶臼山城跡・浦谷古墳群・宮地嶽火葬墓 松ノ尾古墳群火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	30
図24	古寺墳墓群・治部ノ上遺跡・山田遺跡群・横隈狐塚遺跡・菩提寺古寺遺跡 火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	31
図25	津古中契遺跡・ヘボノ木遺跡・火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)	32
図26	ヘボノ木遺跡・下見遺跡・津古土取遺跡・清水山古墳群・荻浦立岩墳墓群 鈴ヶ山古墳群・柳ヶ谷遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・1/40・実測図は1/6)	33
付図	石勺遺跡J地点遺構配置図 (1/100)	

表 目 次

表 1	石勺遺跡J地点1号墓出土須恵器の分析データ	14
表 2	短頸壺法量表	20
表 3	福岡県内出土火葬墓一覧表	21
表 4	火葬墓出土蔵骨器一覧表	34

I はじめに

1. 調査に至る経緯

石勺遺跡J地点は大野城市曙町2丁目9-1に所在する。当地には昭和39年に建築された福岡県春日原寮が建っており、平成7年度に福岡県総務部厚生課より本市教育委員会に、建物の老朽化にともなう建替えの計画のため、埋蔵文化財の有無について照会があった。当地は石勺遺跡F・H・I地点に隣接していたため、石勺遺跡の範囲に含まれると考えられた。平成9年2月には県厚生課・県文化課および本市教育委員会の三者で発掘調査にあたっての協議をおこない、その結果、寮を使用した状態で建物の部分を外して調査を実施することになった。

発掘調査に先立って平成9年6月に試掘調査を実施した。現地表から深さ35～120cmで、ピット・溝など弥生時代の小片を含む遺構を確認した。

発掘調査は地方職員共済組合福岡県支部と委託契約を締結し、石木・丸尾が担当した。調査期間は平成9年7月15日～12月20日の間で、調査面積は開発面積3,302.41㎡のうち2,064㎡である。

調査期間中は、寮生の方々に種々のご負担をおかけした。また、福岡県厚生課の方々には寮生との連絡等多大なご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

整理作業は平成10年度に実施した。

2. 調査体制

平成9年度発掘調査

教育長	堀 内 貞 夫
教育部長	香 野 信 儀 (～1月)
社会教育課長	赤 星 健 彦
文化財担当係長	舟 山 良 一
主任技師	向 直 也
	徳 本 洋 一
	石 木 秀 啓
技師	丸 尾 博 恵
嘱託	西 村 晴 香

平成10年度整理作業

教育長	堀 内 貞 夫
教育部長	高 橋 正 治
社会教育課長	片 岡 猛
文化財担当係長	舟 山 良 一
主任技師	向 直 也
	徳 本 洋 一
	石 木 秀 啓
技師	丸 尾 博 恵
嘱託	明 永 美 和

〔発掘調査参加者〕原田敬子、高木冴子、大海雅子、島崎真知子、高木幸子、西田幸子、岡本妙子、山口シゲ子、前田チエ子、内山マサ子、那波幸子、河野房子、福岡麗子、満富スエコ、吉嗣波津子、藤田和子、篠原純子、三原ひろみ、安永三重、小松みどり、吉田香織、小向井恵子、武下里織、山野洋子、篠原律子、坂元雄紀（早稲田大学）山下知一、江上正高（別府大学）

〔整理作業参加者〕松岡信子、町井裕子、鬼塚穂子、有田朱美、渡辺直美、村山律子、白井典子

Ⅱ 位置と環境

1. 周辺遺跡の概要

大野城市には、北側に大野城が築造された四王寺山、南側には須恵器窯が造られた牛頸山がある。これらの山に挟まれた平野部に、水城跡が所在する。平野の中央には御笠川と牛頸川の2つの河川が流れる。御笠川の南西には水城西門を通り、鴻臚館へと続く官道が検出されている。

石勺遺跡は大野城市役所周辺の曙町・瓦田一帯に広がる複合遺跡である。J地点は曙町二丁目9-1に所在する。現在は市街地となり旧地形はわかりにくいですが、明治時代に作成された地図をみると、現在は削平されているが牛頸川に沿って春日丘陵から八つ手状にのびる微高地が存在していたようだ。

石勺遺跡では、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認されている。今回の調査では奈良時代の火葬墓が出土したことから、周辺の火葬墓について概観していきたい。

大野城市の周辺では、大宰府政庁を取り巻く丘陵上に火葬墓が点在している。このような在り方は都市型⁽¹⁾とよばれ、古墳群と関連付けて考えられない大宰府に特徴的な墳墓である。水城西門を通る官道の西側の丘陵上に、宮ノ本遺跡⁽²⁾ (12)、火葬施設が検出された篠振遺跡⁽³⁾ (11)、古墳の石室内から火葬墓を検出した唐人塚遺跡⁽⁴⁾ (14)、また、東の丘陵上では須恵器有蓋短頸壺を有する結ケ浦火葬墓⁽⁵⁾ (18)、須恵器短頸壺に土師器皿を蓋とする蔵骨器を有する花見ケ丘火葬墓、須恵器壺に杯を蓋とする米嚙火葬墓⁽⁶⁾ (19)、土師器甕の外容器に土師器甕の内容器を伴う峯火葬墓⁽⁷⁾ (20)が知られている。大宰府周辺では、火葬墓が極端に群集することはない。宮の本遺跡では5基がまとまって造墓されているが、墳墓間の距離は100m内外と広く、各墳墓間の単独性は保たれている。

一方、地方型⁽¹⁾とよばれる火葬墓がある。丘陵上に造営された火葬墓群で、数基から数十基が群集して存在している。地方型火葬墓として有名なものには鞍手郡若宮町汐井掛遺跡⁽⁸⁾、朝倉郡朝倉町大迫遺跡⁽⁹⁾、甘木市池の上墳墓群⁽¹⁰⁾などがある。汐井掛遺跡では古墳群が築造された丘陵に、8世紀代の火葬墓5基が検出された。全てに蔵骨器を有し、うち3基は須恵器の短頸壺である。また、5号墳は、墓壙内の中央と四隅から銅銭を出土しており、埋葬に際しての祭祀行為の跡が知られる珍しい例である。大迫遺跡では8～9世紀代の火葬墓74基が丘陵の急斜面に群集して造られている。その形態は、山側に周溝を持つものや蔵骨器を有するもの、墓壙に直接埋葬するもの、石組みを有するもの、石組みの中に蔵骨器を有するものと様々である。池の上墳墓群では8～9世紀代の火葬墓が36基出土している。この墳墓群の特徴は蔵骨器の種類の豊富さにある。須恵器短頸壺・双耳壺、土師器壺・鉢、越州窯系青磁碗、白釉緑彩水注などがあげられる。また、蔵骨器を伴わない墓壙のみのものも多数存在している。

石勺遺跡J地点出土の火葬墓は単独で存在するものの、水城跡よりも北側に、官道よりも東側の平野部に位置し、大宰府周辺の都市型といわれる火葬墓とは立地を異にしているといえる。⁽¹¹⁾

参考文献

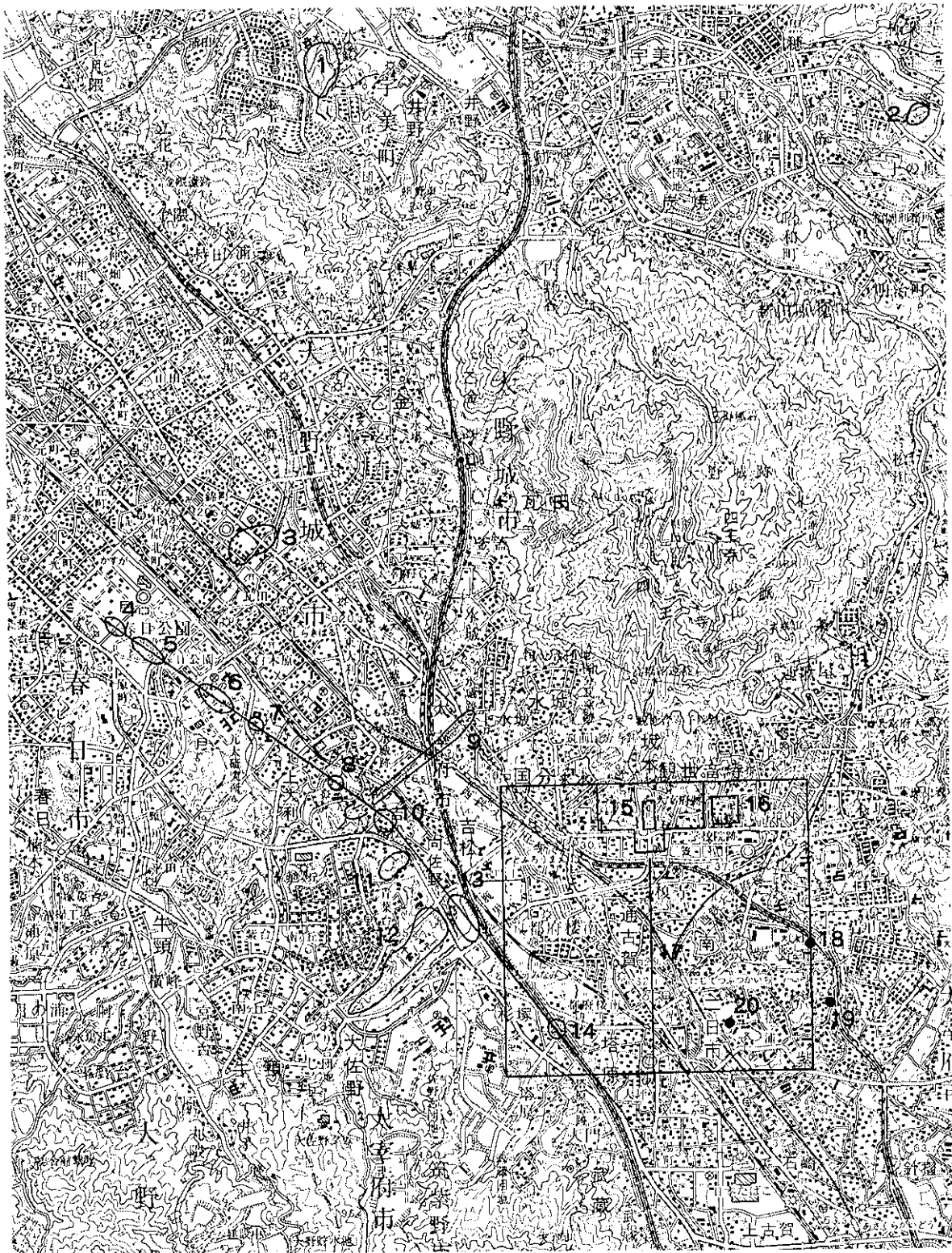
中間研志「大宰府の奥津城」『大宰府古文化論叢』吉川弘文館 1983 狭川真一「古代都市・大宰府の検討－墳墓からのアプローチ」『古文化談叢』第23集 1990

狭川真一「火葬墓の出現 北部九州を中心として」第41回埋蔵文化財研究集会『古墳時代から古代における地域社会』発表要旨資料 埋蔵文化財研究会 1997

狭川真一「古代火葬墓の造営とその背景」『古文化談叢』第41集 1998

註

- 1 狭川真一「古代都市・大宰府の検討－墳墓からのアプローチ」『古文化談叢』第23集 1990
狭川真一「火葬墓の出現 北部九州を中心として」第41回埋蔵文化財研究集会『古墳時代から古代における地域社会』発表要旨資料 埋蔵文化財研究会 1997
狭川真一「古代火葬墓の造営とその背景」『古文化談叢』第41集 1998
- 2 『宮ノ本遺跡』太宰府町の文化財第3集 太宰府町教育委員会 1980
『宮ノ本遺跡Ⅱ』太宰府市の文化財第10集 太宰府市教育委員会 1987
『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ』太宰府市の文化財第21集 太宰府市教育委員会 1993
- 3 『篠振遺跡』太宰府市の文化財第11集 太宰府市教育委員会 1987
- 4 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XⅧ－』福岡県教育委員会 1977
- 5 渡辺正気「和銅銭副葬の一蔵骨器」『九州考古学』第1号 九州考古学会 1957
- 6 『白濁遺跡』大分県佐伯市教育委員会 1958
- 7 『通り浦遺跡・剣塚遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第10集 筑紫野市教育委員会 1984
- 8 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XⅩ－』福岡県教育委員会 1978
- 9 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－24－』福岡県教育委員会 1992
- 10 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集 甘木市教育委員会 1979
- 11 石勺遺跡が微高地に存在していたとしても、他の火葬墓の立地している丘陵とは標高が異なると思われる。ただし、平野よりも高所に造るという意識があったと考えたい。



〈凡例〉

- | | | | | |
|------------------|---------|-------------------|-----------|-----------|
| 1 松ノ尾古墳群 | 2 塔ノ尾遺跡 | 3 石勺遺跡 | 4 先ノ尾遺跡 | 5 春日公園内遺跡 |
| 6 九州大学筑紫キャンパス内遺跡 | 7 池田遺跡 | 8 谷川遺跡 | 9 水城跡 | |
| 10 島本遺跡 | 11 篠振遺跡 | 12 宮ノ本遺跡 | 13 前田遺跡 | 14 唐人塚遺跡 |
| 15 大宰府政庁跡 | 16 観世音寺 | 17 大宰府条坊跡（推定域） | 18 結ヶ浦火葬墓 | |
| 19 米晒火葬墓 | 20 峯火葬墓 | （ゴチックは火葬墓を出土した遺跡） | | |

図1 石勺遺跡と周辺の主な遺跡（1/50,000）

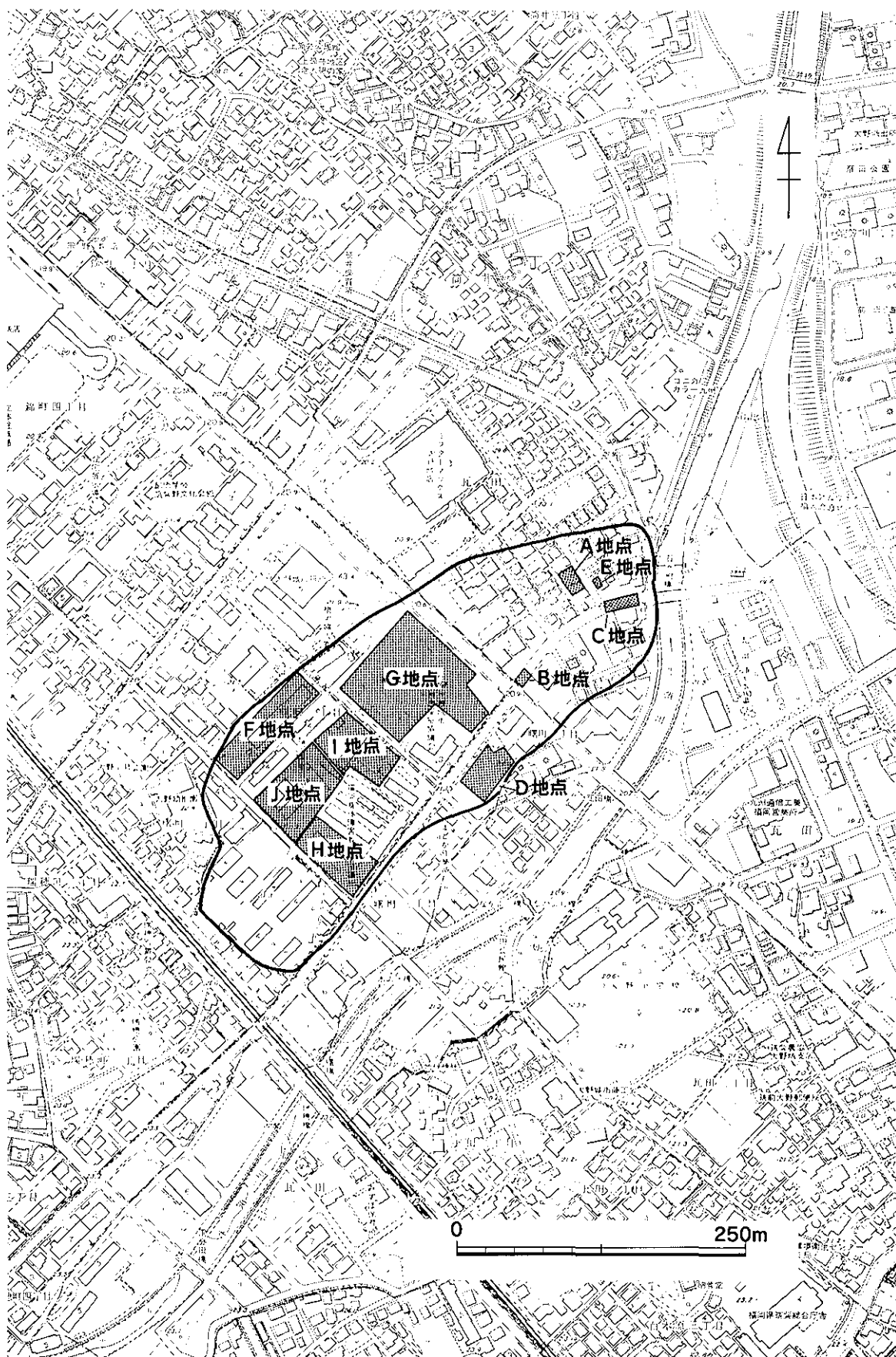


図2 石勺遺跡の調査箇所 (1/5,000)

Ⅲ 調査の結果

1. 調査概要

石勺遺跡は9次にわたる調査が行われており、今回のJ地点が10次の調査となる。J地点に隣接するI地点は、石勺遺跡の弥生時代の集落跡の中でもはずれに当たる地域と考えられ、北西に行くにしたがって遺構密度が低くなるという特徴があった。J地点はI地点の北西に続く位置にあり、遺構密度が低いということは当初から予想されていた。しかし、J地点の南に当たる県職員住宅とは1m程の比高差があり、試掘調査での南東部の遺構面がやや高いという所見から、微高地の先端部にあたると考えられ、大きく削平を受けている可能性もある。

調査は排土の持ち出しができなかったため、3回にわけて実施した。表土剥ぎには重機を用い、現地表下約35～120cmで遺構面となった。調査は北東側から行い、排土の反転後、北西部、南西部と続いた。北東部では風倒木が多く検出された。北西部でも風倒木が多く見られたが、南西部ではややその数は少ないという印象をうけた。南西部では南西～北東に走る畝状の攪乱がみつき、その畝の間で火葬墓が検出された。火葬墓は表土剥ぎの時に重機に引っ掛かり発見された。蔵骨器の一部を破壊してしまったため表土のなかから破片を拾い上げた。この状況からも当地が削平を受けていたことは明らかで、遺構配置図南部にある高低差が旧地形の痕跡と考え、その差は南側が大きく、北側に向かって浅くなり、最後には自然に消滅してしまう。現在はJ地点の南に当たる県職員住宅が建っている低丘陵が、当地まで延びていた可能性も考慮に入れる必要があるだろう。

検出された遺構には古墳時代のピット・奈良時代の火葬墓・風倒木がある。風倒木は23例を調査し、2例から遺物を出土した。その倒木方向は様々で倒木の要因を考える事は困難である。出土遺物は非常に少なく整理箱4箱分しかない。弥生土器・土師器・須恵器・陶器・石器がある。

J地点は奈良時代には墓地として利用されていた事が判明した。隣地であるH地点から奈良時代の遺物は出土しているが、遺構に伴うものではなく、この時代の石勺遺跡の位置付けが復元できる。

2. 遺構と遺物

(1) 火葬墓

1号墓（図4、図版4～5）

重機による表土剥ぎの際に発見されたため、一部破損している。墓壙は内法で長さ72～76cm、深さ24～28cmの隅丸方形。四隅には石を配し、中央に蔵骨器が傾いた状態で出土した。蔵骨器は本来正位に埋置されていたものが、土圧か削平時かに傾いたと考えられる。また、配石とは接していない。埋土は上層と下層に分層できる。上層（12cm）は少量の炭を含む黒褐色土を呈し、下層は炭などを含む黒色土（7cm）と地山の土をブロック状に含むにぶい黄褐色土（4cm）に分層できる。しかし、蔵骨器を挟んで右断面は、木炭による腐食がすすんでいることと、配石により分層ができな



図3 J地点遺構配置図 (1/350)
(矢印は風倒木の倒木方向)

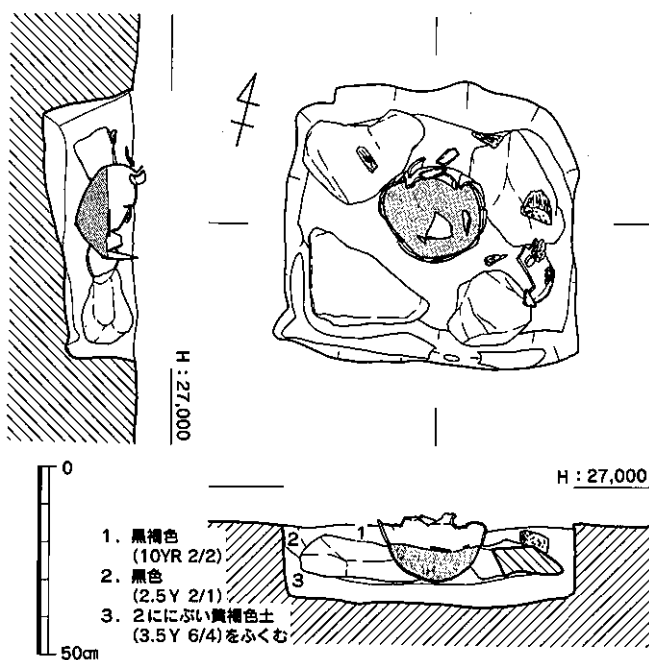


図4 1号火葬墓実測図 (1/20)

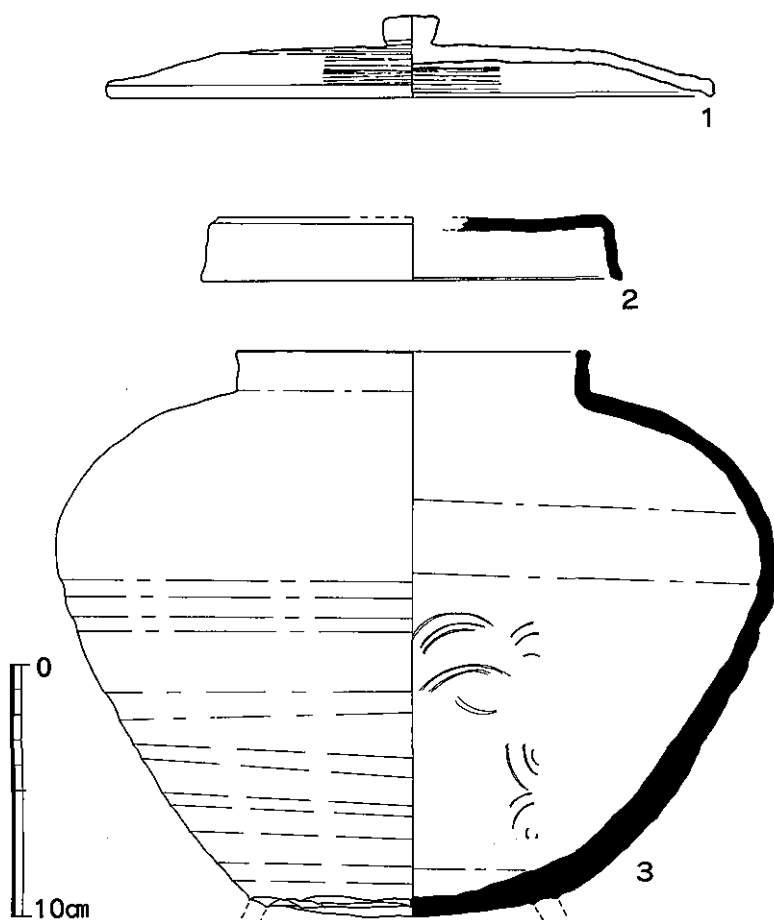


図5 1号火葬墓出土土器実測図 (1/3)

かった。埋土には木炭を含む。蔵骨器・配石は床面から7cm程浮いた状態で検出できた。南東隅に置かれた石に立てかける様にして、土師器蓋が出土した。主軸はN-24°-E。蔵骨器内部の埋土を掘り下げていくと、火葬骨が土器下半部に納められていた。

出土遺物 (図5、図版6)

土師器 (1)

1は土師器の蓋で口径24.0cm、器高3.2cmを測る。撮みが高く、口縁部がやや屈曲するタイプである。天井部は回転ヘラケズリ後にヘラミガキ、口縁部にかけてと内面にもヘラミガキを施す。色調は橙色を呈する。

蔵骨器 (2・3)

2は須恵器蓋で、復元口径16.6cm、残存器高2.55cmを測る。約半分を欠損しているが、おそらく天井部中央には円筒状の撮みがついていたと思われる。天井部はほぼ平坦で肩部を面取りしている。肩部から口縁部へはやや開き気味に下り、端部で外湾する。口縁端部は内傾した平坦面を有する。色調は灰色を呈し、天井部は回転ヘラケズリを施す。3は須恵器の短頸壺で、高台を打ち欠いて使用している。復元口径14.0cm、残存器高22.5cm、胴部最大径28.3cmを測る。口縁部は短く直立し、上面を僅かに窪ませる。体部中央よりやや上位に胴部最大径を有し、肩は丸みをもつ。

胴部下半は回転ヘラケズリを施し、最大径のやや下位に3～4条の強い回転ナデを巡らせる。内面には同心円の当て具痕がかすかに残る。色調は灰色を呈し、肩部には自然釉がかかる。また、肩部には蓋の口縁部が釉着した痕跡があり、重ねて焼成されたと考えられる。また、胴部にも焼成時に釉着した須恵器片が残る。

(2) 溝

今回の調査で溝が3条確認できた。いずれも調査区の北西部にあたり、2度目の排土の反転時に検出した。出土した遺物は少なく、しかも小破片のため実測できない。

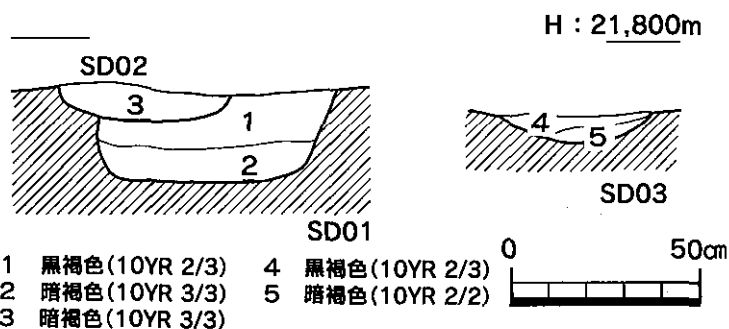


図6 SD01・02・03土層実測図 (1/20)

SD01 (図6、図版5)

南西方向にのびる溝である。幅40～60cmで溝底の標高は南西にいくほど高くなる。南西部は調査区外にのびる。検出長11.6mである。埋土は暗褐色の砂層の上にきめの細かい砂層が堆積している。上層で水の流れた跡が観察できた。

SD02

1号溝に重なるようにして走る。埋土は暗褐色の砂層である。検出長は7.5m、溝底の標高は南西にいくほど高くなる。

SD03

SD01・02に平行して走る溝である。検出長9.0m、溝底の標高は南西にいくほど高くなる。埋土は粒子の細かい砂層の上に暗灰色の土をブロック状に含む土層の堆積がみられる。

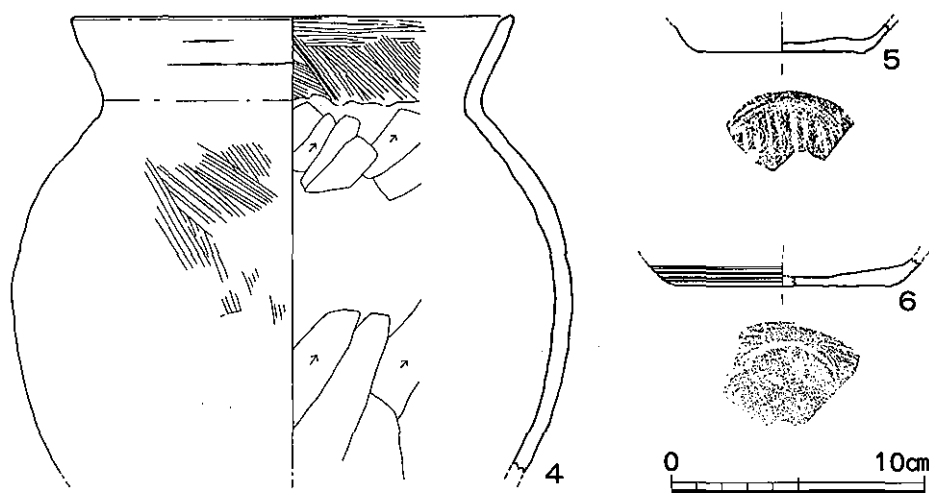


図7 SP16・SX07・SX36出土土器実測図 (1/3)

(3) ビット

SP16

径約45×44cm、深さ約20cmのビットである。土師器が一点出土した。

出土遺物

土師器（図7、図版6）

4は復元口径17.0cm、復元胴部最大径21.0cmの土師器の甕である。口縁部は直立に近くなり、頸部径は約14.0cmを測る。口縁端部は丸みを有し、先端部のみやや内湾する。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリ。外面には煤が付着する。

(4) その他の遺構

SX07

南東部は調査区外にのびる。深さ約3cmである。

SX36

長さ1.2m、幅約70cm、深さ約34cmを呈し、カクランをうける。

出土遺物（図7、図版6）

5は復元底径6.6cmの土師器小皿の底部片である。外面は回転糸切りのち、板状圧痕が残る。内面は中央部に横方向のナデを加える。色調はにぶい黄橙色を呈する。SX07より出土。6は土師器杯底部である。復元底径8.6cmを測り、回転糸切り。内面に煤痕があることから、灯明皿の可能性はある。SX36より出土。

(5) 風倒木痕

SX01

径約1.04×0.92m、深さ約12cmの風倒木痕である。検出面での土層観察より南東方向に倒木していたと推定できる。

SX03

北東側は調査区外に広がる。径約2.86m、深さ38cm。倒木方向は南東方向。

SX04

風倒木痕SX06に切られる。径約5.0×3.3m、深さ約40cmを測る。倒木方向は南西方向。

出土遺物（図8、図版6）

7・8は土錘である。7は両端を欠損している。残存長1.3cm、幅1.0cm、孔径0.35cm。8は長さ2.7cm、幅1.2cm、孔径0.3cm

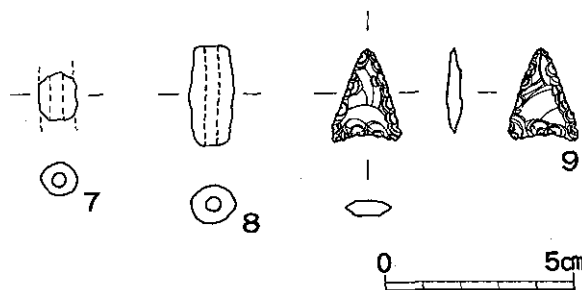


図8 SX01・SX03・SX04出土土器実測図
(1/2)

を測る。7はSX03から、8はSX01から出土した。9はサヌカイト製の石鏃である。SX04の黒色土から出土した。基部を片方欠損する。長さ2.5cm、幅1.85cm、厚さ0.4cm、重さ1.49gを測る。

(6) その他の出土遺物 (図9・10、図版6)

10は土師器の杯である。復元口径13.6cm。体部は直線的にのび、口縁端でやや外湾する。色調は橙色を呈する。11は土師器の甕である。口縁はやや内湾し、端部は丸く仕上げる。調整は内面ヘラケズリ。12は瓦質の鉢である。口縁部外面は接合部を薄く削ることで稜線をつくる。内面にはハケ目が残る。色調は黄灰色を呈する。13は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ、内面同心円の当て具痕が残る。14は調査区南部に見られる畝状のカクランから出土した黒色土器の坏底部である。内面は黒褐色を呈し、外面は回転ヘラケズリを施す。外面には、二行にわたって墨書があるが、『□□/□蚕日□』としか解読できない。また、文字の下地に墨痕が確認できた。15はすり鉢である。16は不明土製品であるが、中央に両面とも穿孔途中の様なくぼみが存在し、未完成品と思われる。

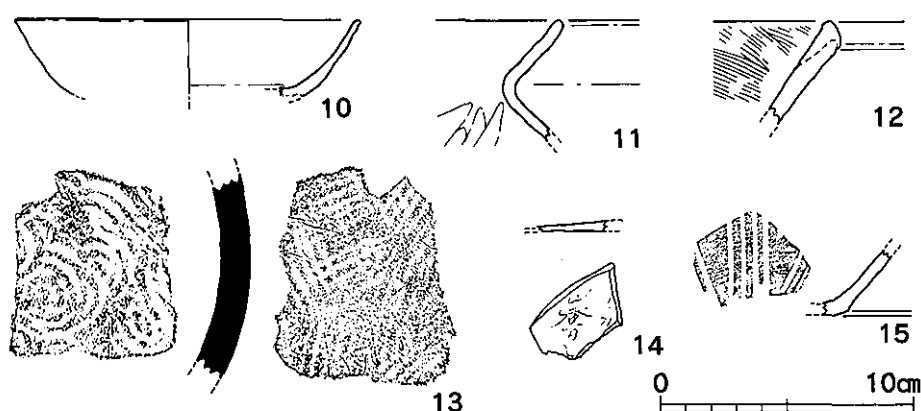


図9 その他の出土土器実測図 (1/3)

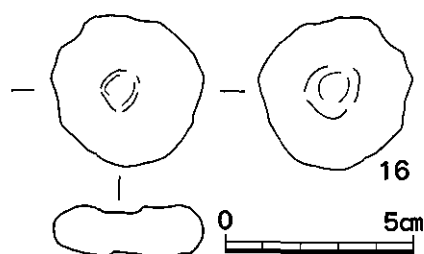


図10 その他の出土土製品実測図 (1/2)

Ⅳ 石勺遺跡 J 地点 1 号墓出土須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

土器類の素材は粘土である。粘土は岩石が風化して生成したものであるが、粘土生成の過程については十分わかっていない。ただ、粘土学者は岩石が存在場所で、そのまま風化し生成した一次粘土（残留粘土）と、河川水などで岩石破砕体が流され、別場所に堆積して生成した二次粘土（漂積粘土）に 2 大別している。

岩石が完全に風化分解した理想粘土の理論化学式は $\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ で表示される。しかし、この化学式で表される粘土は天然には見つからない。Si、Al 以外の K、Ca、Na、Fe、Mg、Ti の主成分元素をはじめ、微量元素も含めて岩石と同様に含有されている。

一般に、火成岩中には全元素が含有されていると考えられているから、含有量は減少しているとはいえ、粘土中にも全元素が含有されているものと思われる。つまり、母岩を構成した鉱物の微粒子が残渣鉱物として粘土中に含有されている訳である。

元素分析による古代土器の産地推定法の開発研究では素材粘土を出発物質として分析を進めることもできようが、筆者の場合、窯跡出土須恵器は K—Ca 分布図と Rb—Sr 分布図上で集中して分布することが発見されたことが動機となって研究は進められたので、製品である須恵器の破片から分析は進められることになった。

筆者のところで開発された産地推定法ではまず、生データを K—Ca、Rb—Sr の両分布図上にプロットし、定性的に生産地である窯跡出土須恵器の分布領域に対応させる。対応しない場合はこの段階で産地候補からはずされる。

次いで、多変量解析法の一つである判別分析法を使って、各母集団（窯または窯群）への帰属条件を求め、遺跡出土須恵器などの母集団への帰属条件を満足するかを求めて、産地を推定する。勿論、考古学的な諸条件も満たすことは当然である。

石勺遺跡 J 地点 1 号墓から出土した有蓋短頸壺は 8 世紀代のものと推定されており、かつ、墓壙の様子からは畿内産の可能性があるという。もちろん、地元の須恵器生産地である牛頸窯群の製品である可能性もある訳である。

同一固体の 2 点の破片は、まず、表面を研磨して自然釉などの表面付着物を除去し、次いで、100 メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、13 トンの圧力を加えてプレスし、内径 20mm、厚さ 5 mm の一定形状の錠剤試料を作成した。蛍光 X 線分析は相対分析であるので、分析試料を一定形状にしておくことは不可欠である。

完全自動式蛍光 X 線分析装置（波長分散型）を使用して、各元素の K α 線のピーク面積を求め、K、Ca、Fe、Rb、Sr、Na の 6 元素を測定した。

標準試料には岩石標準試料、JG—1 を使用した。分析値は JG—1 による標準化値で表示した。

表 1 には分析データが示されている。同一固体の 2 片の試料は全因子で類似していることがわかる。

同じ桶の中でブレンドされている粘土は溶液並みに、ほぼ、均質と考えてよいことを示している。しかし、同一窯から出土した破片を多数分析すると、表1のように全因子でうまくそろわない。K-Ca、Rb-Srの両分布図で集中して分布するものの、ある程度のばらつきがある。筆者は素材粘土を採掘する場所が若干ずれば、それに応じて、粘土の元素濃度にもずれを生じることの原因があると考えている。

とにかく、同一固体の異なる2片の分析値は全因子でよくそろうのである。

次に、表1の生データを使って両分布図を作成するのであるが、比較資料として、地元、牛頸窯群の須恵器の両分布図を描いてみた。上平田2号窯、平田窯、小田浦窯などの窯跡出土須恵器が比較対照資料として使用された。図11には牛頸窯群の須恵器のK-Ca分布図を、図12には、Rb-Sr分布図を示してある。図11ではCa量が多いものが数点あるが、これらを除いて他の試料を包含するようにして牛頸領域を描いてある。本来、この領域は95%の資料を含む等確率楕円で描かれるものであるが、ここでは描き易いように長方形で描いてある。したがって、当然、この領域は定性的に領界を示しているにすぎない。牛頸窯群の製品は畿内の製品に比べて、Ca、Sr量が多いのが特徴である。比較のために、陶邑領域をしめしておいた。判別分析にかけられるまでもなく、陶邑群と牛頸群は完全に相互識別できることは図11、12からわかる。

次に、石勺遺跡出土の有蓋短頸壺の両分布図を図13に示す。両分布図において、牛頸領域の右端部分に分布していることがわかる。大阪陶邑産の須恵器の中で、この位置に分布するものは皆無である。兵庫県などの畿内産の製品の中にもない。したがって、この有蓋短頸壺の胎土は畿内のものではない。むしろ、図13で、両分布図で牛頸領域に分布するところから、牛頸窯群内のどこかで作られた製品である可能性が十分あることを示している。

もう一つ注目すべき点は表1のNaの含有量である。JG-1による標準化値にして、0.5を越える。牛頸窯群の製品にはNaの含有量が多い。これに対して、畿内産の須恵器にはNaの量は少ない。0.5に近い値を示すものは皆無である。したがって、Na因子からも、石勺遺跡出土の有蓋短頸壺は畿内産ではない。むしろ、地元、牛頸窯群産の須恵器である可能性が高い。

以上のデータから、石勺遺跡J地点1号墓から出土した有蓋短頸壺は地元の須恵器大生産地である牛頸窯群の製品と推定される。

表1 石勺遺跡J地点1号墓出土須恵器の分析データ

		分 布 因 子					
		K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
No.1	有蓋短頸壺	0.484	0.443	2.27	0.523	0.905	0.562
No.2	有蓋短頸壺	0.494	0.437	2.25	0.544	0.906	0.569

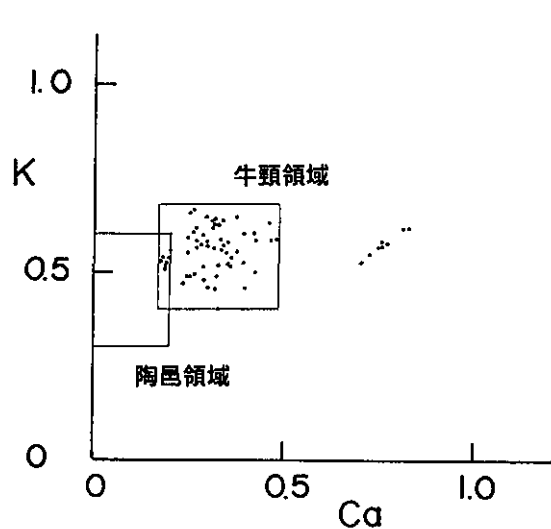


図11 牛頸窯群出土須恵器のK-Ca分布図

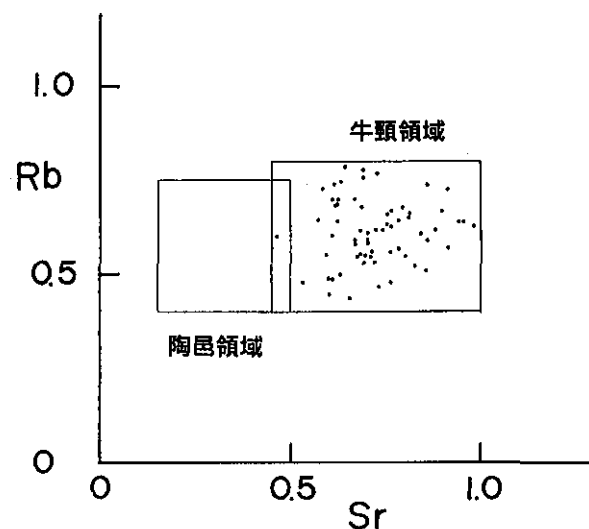


図12 牛頸窯群出土須恵器のRb-Sr分布図

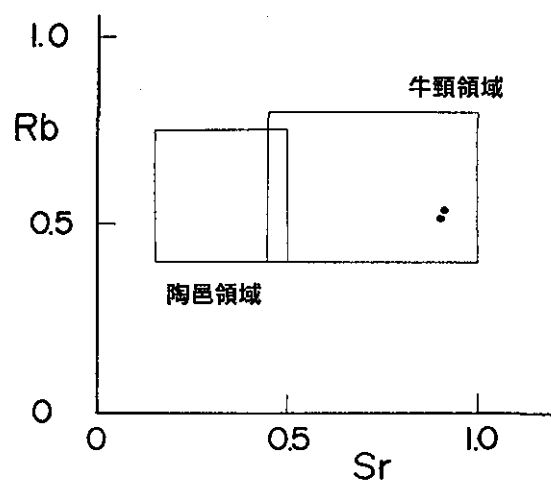
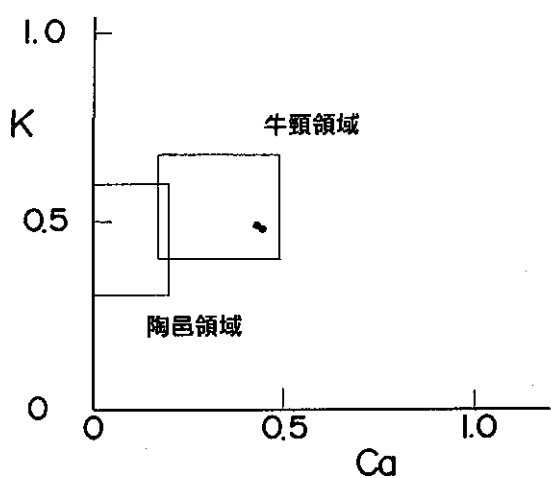


図13 有蓋短頸壺の両分布図

V 石勺遺跡火葬墓出土人骨について

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座

田 中 良 之・金 宰 賢

1. はじめに

福岡県大野城市石勺遺跡において蔵骨器を有する8世紀の火葬墓から人骨が出土した。人骨は大野城市教育委員会による現地での調査ののち、蔵骨器とともに取り上げられ、その後九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座へと搬入された。以下に整理・分析の結果を記載する。なお、蔵骨器は研究室内での人骨取り上げ後、大野城市教育委員会へ返却したが、火葬人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状態および保存状態

蔵骨器は石囲いの中に安置されていたが、土圧のため上半部が一部破損していた。その蔵骨器の下半部に火葬骨が堆積していたが、細片化した状態のため人骨の細かい同定や位置関係の観察はほとんど不可能であった。しかし、もとより火葬後に蔵骨器に収骨したものであるため、この場合問題となるのは、人骨の状態が解剖学的正位であるかではなく、拾骨に際して順序や選択性があったか否かである。そのため、蔵骨器内に堆積した焼骨片を上から順に5面に分けて採取し、それによって拾骨の順序や選択性を検討することにした。

まず、最上層の第1面には、ラムダ縫合部分の後頭骨を含む頭骨片、歯冠・歯根片に椎骨片、肩甲骨片、前腕骨片、右大腿骨片、左脛骨片などが認められた。もちろん、火葬によって人骨は細片化しているので、これ以外にも同定不能の部位が多数存在する。

第2面では、頭蓋底付近の頭骨片、右上顎小臼歯歯根、三角筋粗面を含む上腕骨片、前腕骨片、粗線を含む大腿骨片などが認められた。

第3面では、軸椎（第二頸椎）歯突起を含む頸椎片、肋骨片、前腕骨片、右寛骨片、脛骨片などが認められた。

第4面では、頭蓋冠および右錘体の頭骨片、左肋骨、前腕骨片、粗線を含む大腿骨骨体中央部、頸骨片などが認められた。

第5面では、頭頂骨片、下肢骨片若干が認められ、炭粉や灰を多く含んでいた。

以上のように、蔵骨器内に堆積した骨片は、頭から下肢骨まで全身のものであり、同定不能の骨片がむしろ多いことを考えると、部分的にせよ全身の骨を拾骨したと考えられる。したがって、拾骨にあたっての部位の選択性は認められない。また、上層から下層まで、頭から下肢までの部位の構成が変わらないようであり、量的にも上層が頭蓋片が多いという傾向も認められなかった。また、蔵骨器内には副葬品は認められなかった。

3. 年齢・性別

上記のように、本人骨は火葬による熱変成が激しく、多くは細片化し変形していた。一般的に火葬骨は、このような事情から年齢推定および性判定の根拠となる所見を得ることは困難である。しかし、本人骨においては以下の所見が得られた。

まず、脛骨近位端に骨端線が認められなかった点は、本人骨が成人に達していたことを示している。また、頭蓋骨片からうかがえる頭蓋主縫合の癒合状況は、冠状縫合・矢状縫合とも、内板・外板の閉鎖が開始しているというものであった。したがって、これらの所見からみると、本人骨は成人で、成年から熟年にかけての年齢であった可能性が高い。

次に、性別についてみると、上腕骨三角筋粗面が発達しており、大腿骨粗線もやや発達していた観がある。もちろん、火葬時の熱による変形が著しいため、これら筋付着部の発達程度がそのままの姿を伝えているとは考えられない。しかし、全体的に骨質がしっかりしていることや厚みもある点などと、筋付着部の所見は矛盾するものではない。したがって、本人骨は男性であった可能性が高いといえよう。

4. おわりに

以上のように、本人骨は火葬骨であり、熱変成が著しいにも関わらず、年齢推定・性判定に有効な部位が遺存していたために、成年～熟年の男性であった可能性を指摘することができた。古代火葬墓の被葬者については、性別・年齢が明らかになる例は多くはないが、被葬者が成人男性の可能性が高いという結果は、本遺跡の性格を考えるうえで重要な情報の一つといえよう。

また、本火葬人骨においては蔵骨器への拾骨の方法についても検討した。というのも、現代において行われているような、下肢から上半身、頭という拾骨順序であるのか、あるいは別の順序があったのか、あるいはこんにち「喉仏(のどぼとけ)」と通称される軸椎(第二頸椎)は特別の扱いを受けているのか、といった葬法上のパターンの比較と変遷への基礎資料として重要と考えたからである。その結果は、上層から下層まで、基本的には下肢から頭までを含んでおり、選択性や部位による拾骨順序があったとは考えがたい。また、軸椎もちょうど真ん中あたりの位置にあり、特別の注意を払われていた形跡は認められなかった。そして、全体に炭化材や炭粉・灰を含み、最下層では大半を占めていたことからみると、拾骨の際に火葬骨とともにこれらも一緒にすくって蔵骨器に入れた可能性が高いと考えられる。したがって、現代とは大きく異なる拾骨の方法であったと考えられる。古代における火葬法と拾骨法については、いまだ不明な点が多く、今後の資料の蓄積を待たねばならないものの、本例はその基礎資料として重要であるといえよう。

最後に、本人骨の調査の機会を与えていただいた、丸尾博恵氏をはじめとする大野城市教育委員会の諸氏に感謝申し上げたい。

Ⅵ ま と め

1. 遺構の時期

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。風倒木痕から出土した石鏃(15)は、挟りが小さく弥生時代前半にあたる。出土した土師器甕(4)から、SP16は柳田編年のⅢa⁽¹⁾式にあたると考えられる。また、南側に隣接しているH地点からも、同時期の土師器が出土している。SX36出土の土師器杯(6)は、復元底径8.6cmで、法量的にはXVII型式⁽²⁾(13世紀前半～中頃)に含まれる。また、SX07出土の土師器小皿(5)は復元底径6.6cmと小型化の傾向がみられるXVI～XVII型式⁽²⁾(13世紀初頭～中頃)にあたり、H地点で出土した土師器杯・小皿の年代に対応している。

次に、奈良時代の遺構である1号火葬墓の年代を、牛頸窯跡群出土⁽³⁾の資料から考えてみたい。まず、牛頸窯跡群より短頸壺を出土する資料を抽出し、杯身・蓋から年代を割り出し、つぎに、短頸壺の特徴を比較していくという方法をとった。

もっとも古いと考えられるものに、井手窯跡群38・39号窯出土と井手窯跡群3号窯灰原出土の須恵器があげられる。どちらの資料にも、かえりのついた蓋とかえりが消滅し口縁端部の下り曲げの長い蓋が含まれている。また、杯身は体部が直線的に立つ、器高の高いタイプのものが大半を占める。一方、短頸壺の形態的特徴は、38・39号窯出土のものは肩部の張りが強く、胴部上位に胴部最大径をとる。3号窯灰原出土の短頸壺は、38・39号窯出土と同様に肩部は張るものの器高が高くなり、やや後出の感がある。これらの短頸壺は8世紀初頭に比定されている大宰府史跡中門跡・南門跡出土のものと比較して、肩部から胴部にかけての屈曲に丸みを帯びることから、それらよりも後出するものと思われる。そこで、大宰府史跡SK4141⁽⁴⁾に相当する8世紀前半の時期を与えたい。

次の段階に考えられるのは、井手窯跡群22・30～32号窯灰原出土、井手窯跡群23～36号窯灰原出土である。蓋のかえりが消滅し、身では器高が低くなり、法量の小さなものが現れる。この資料を8世紀中頃に位置付けたい。短頸壺は前代よりも口縁部の立ち上がりが低くなり、肩部の張りが弱く丸みを帯びるという特徴を有する。大宰府史跡SD2340⁽⁵⁾出土の短頸壺にみられる胴部が丸く最大径を中位でとる形態が、前半末に出現し、この時期に盛行すると考えられる。

短頸壺の胴高指数が大きくなるのが次の段階である。器高に対して胴部の位置が上位にあるのが特徴で、前段階のものと器高は同じでも、形態は全く異なる。笹原窯跡群51・52号窯灰原出土の杯身は体部が外方に開き、大形のものも出土している。この時期が8世紀中頃～後半と考えられる。

SX2999⁽⁶⁾の時期に比定できる井手窯跡群40～42号窯では、低い高台が底端部よりやや内側に付けられ、体部は直線的である杯身が出土している。短頸壺の胴高指数は小さくなり、口縁部が外方に開くようになる。

次に、1号墓から出土した土師器について、大宰府史跡出土資料を参考に考えてみたい。SK4141出土の蓋は、須恵器同様偏平なボタン状の撮みを有し、口縁端部は断面三角形に折れ曲がる。SD2340ではボタン状の撮みの径が大きくなる。1号墓の蓋は、天井部に平坦面を有し、撮みが高く、

口縁端部がやや屈曲するタイプで、内外面にヘラミガキを施すといった特徴を持つ。SD4345⁽⁷⁾は法量的には異なるが、最も形態が類似する。SX2999になると撮みが高く、口縁端部が強く屈曲するようになる。

1号墓の年代を考えると、短頸壺では口縁部が直立し、肩部は張るものの底部に締まりがなくなる、土師器蓋では径の小さな高い撮みと、口縁端部の処理の曖昧さなどから、8世紀中頃～後半に位置付けたい。

2. 火葬墓について

J地点出土の1号墓の特徴として、方形の墓壇の四隅に石を配した形態があげられる。この様に四隅を意識したものには福岡県内では汐井掛遺跡⁽⁸⁾第5号墳墓がある。第5号墳墓は52cm×55cmの不整形方形で深さ12cmの墓壇の四方（北西・北東・南西・南東）と蔵骨器の下から銅銭（皇朝十二銭）を3～5枚出土している。また大迫遺跡⁽⁹⁾23号墓と37号墓では墓壇の中央と四方に口縁部を重ね合わせた土師器杯を置いている。これらの土器もまた四方を意識したものと考えられる。このような祭祀行為の形跡を留めた火葬墓と1号墓での祭祀行為を比較して考えたい。23号墓では墓壇の四隅と中央に川原石を2個ずつ置き、焼き台として使用している。土師器杯は二次加熱を受けていないことから、その後の祭祀行為に伴うものと考えられている。37号墓は火葬後木櫃に入れて埋葬され、中央の土師器杯は木櫃内に納められていた。J地点の1号墓では埋土に木炭を含むものの墓壇に火を受けた跡はなく、火葬は別の場所で行われていた。火葬後に配石を置き蔵骨器を埋置していることから、祭祀行為が行われたと考えたい。土師器蓋の位置付けとしては供献土器とし、祭祀の過程で石の上に置かれたものとしたい。

従来、蔵骨器用との観念で使用された短頸壺は、打ち欠きはなく完形品で発見されると認識されてきたが、今回は高台が打ち欠いてある状態で発見された。また、高台打ち欠きの短頸壺を出土した遺跡も過去に報告されている。その遺跡には池の上墳墓群⁽¹⁰⁾20号・36号火葬墓、大迫遺跡⁽⁹⁾24号火葬墓、津古中剪遺跡⁽¹¹⁾1号蔵骨器がある。この行為の意味するところを考えると、池の上墳墓群が一つの視点を与えてくれる。この墳墓群では37基の火葬墓が出土し、そのうち16基が蔵骨器を使用していた。蔵骨器の器種は須恵器壺・白釉水注・須恵器双耳壺・土師器杯・須恵器甕・土師器鉢等、多種多様だがほとんどの底部に穿孔があったり、口縁部を打ち欠いたりしている。最も古い31号短頸壺には欠損部は確認できないが、20号・36号火葬墓出土短頸壺では高台を打ち欠いている。これは墳墓に埋葬するにあたり、日常品を非日常的な世界へ送り込むために、或いは死者との断絶を計る為の行為と理解される。このことは、高台打ち欠きが特別な行為ではなく、口縁部打ち欠きや底部穿孔といった埋葬儀礼に関係した行為であると考えられる。口縁部打ち欠きにしても、高台打ち欠きにしても、一部を欠く場合と全てを欠く場合とがある。口縁部では蓋が被せやすいという利点があるが、高台では安定感に欠けるという欠点になる。また、井戸から出土した短頸壺にも高台打ち欠き例がある。那珂遺跡⁽¹²⁾第21次調査第55号井戸出土の短頸壺である。この井戸は8世紀中葉から9世紀前半にかけて使用されていたと報告され、出土した短頸壺の形態的な特徴から石勺遺跡出土

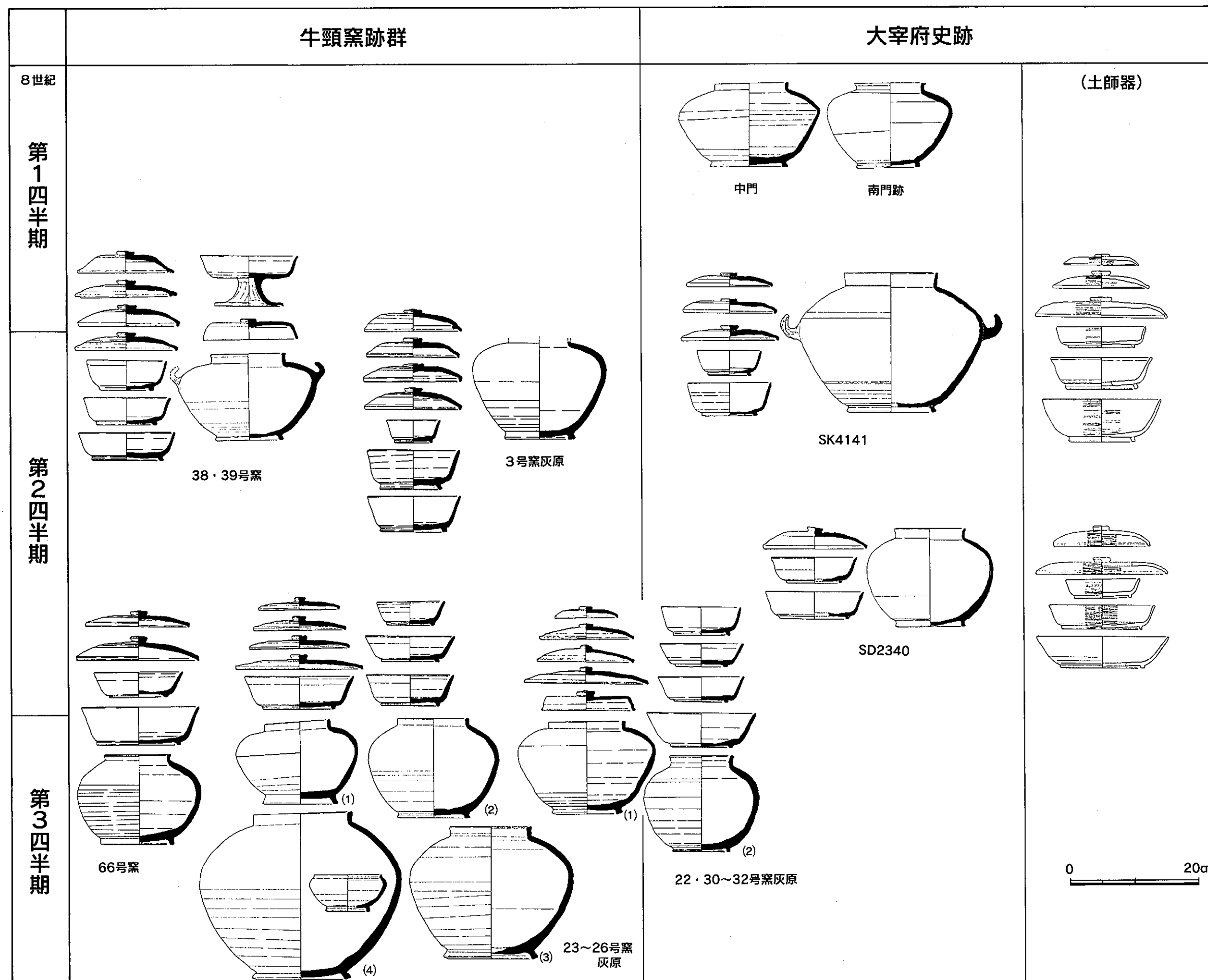


図14 牛頸窯跡群出土須恵器編年表 (1/6)

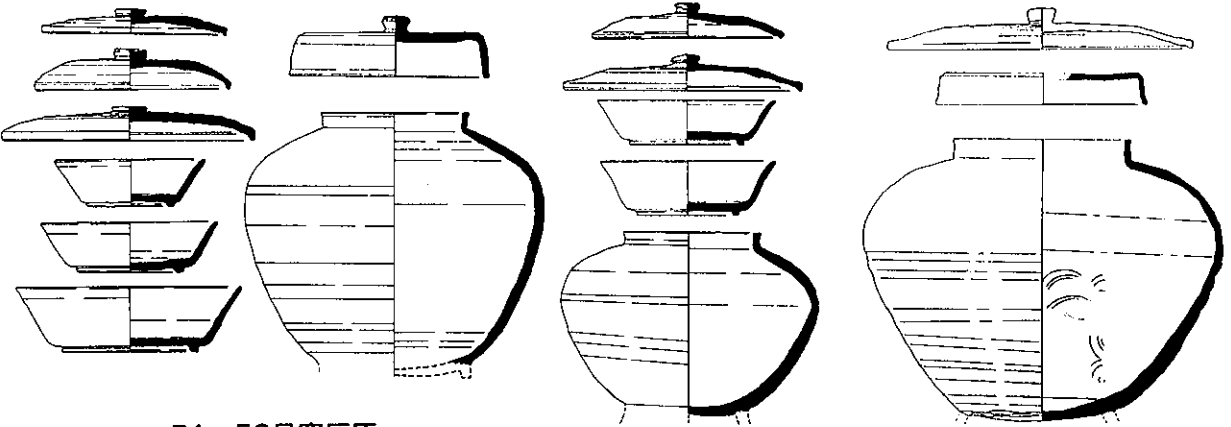
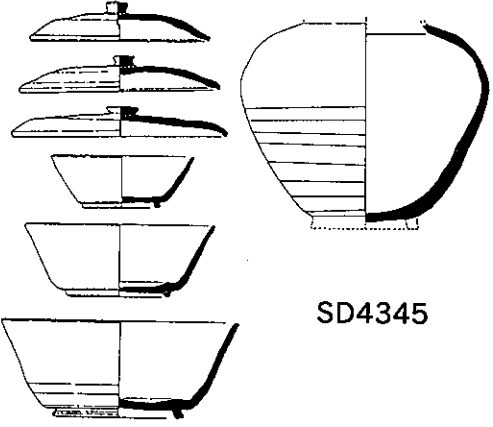
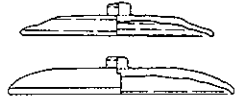
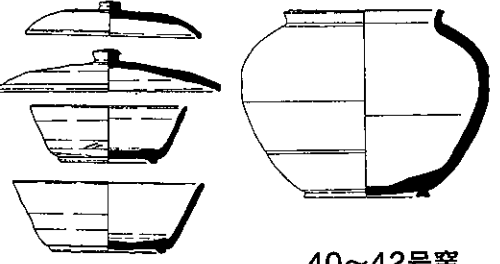
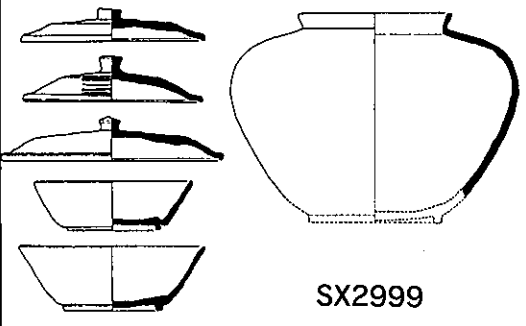
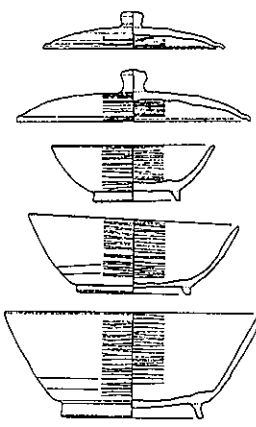
	牛頸窯跡群	大宰府史跡	(土師器)
第3四半期	 51・52号窯灰原 11・12号窯煙道部 石勺遺跡J地点	 SD4345	
第4四半期	 40~42号窯	 SX2999	 0 20cm

図15 牛頸窯跡群出土須恵器編年表 (1/6)

のものと時期的に並行する。高台打ち欠きは井戸の使用にあたっての祭祀行為の結果と考えられる。このように、短頸壺の高台打ち欠きも儀礼的な行為であった可能性を示している。

次に底部穿孔と埋葬状況の関係を見ていきたい。表1を見ると、両者の関係は明らかで蔵骨器を正立させるか倒立させるかによって、埋葬儀礼での行為が異なると考えられる。また、全般的に正立が多く、倒立は土師器に多いといえる。8世紀代の大宰府周辺の都市型火葬墓に倒立はなく、9世紀まで続く地方型の火葬墓で、須恵器の蔵骨器を使用しなくなったものに多く見られる。

石勺遺跡はその立地にも特徴がみられる。水城跡を北に越え、官道より東側に位置し、平坦な地形（比高差1m程の低い台地状の先端部が削平されているのか）に造られている。古墳との関係は考えられず、大宰府周辺が公の葬地として利用されていたことを考えると、その領域に造墓出来なかった集団或いは個人の墓と考えられる。単独で出土していることから、広い墓域を有することが可能であった人物であろう。今回の火葬墓の出土は、大宰府周辺では、須恵器短頸壺の高台打ち欠きがみられないことから大宰府の公地と水城以北の関係を考える必要性を与えてくれた。

註

- 1 柳田康雄「2-2九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991
- 2 山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『九州上代文化論集』 1990
- 3 『牛頸窯跡群』Ⅰ・Ⅱ（牛頸川治水ダム関係埋蔵文化財調査報告）
福岡県文化財調査報告書第80・89集 1988・1989
- 4 『大宰府史跡』（平成6年度発掘調査概報）九州歴史資料館 1995
- 5 『大宰府史跡』（昭和58年度発掘調査概報）九州歴史資料館 1984
- 6 『大宰府史跡』（昭和61年度発掘調査概報）九州歴史資料館 1987
- 7 『大宰府史跡』（平成8年度発掘調査概報）九州歴史資料館 1997
- 8 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XX—』福岡県教育委員会 1978
- 9 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—24—』福岡県教育委員会 1992
- 10 『池の上墳墓群』（甘木市文化財調査報告第5集）甘木市教育委員会 1979
- 11 『津古中剪遺跡』（小郡市文化財調査報告書第33集）小郡市教育委員会 1986
- 12 『那珂5—第10・11・12・14・16・17・21次調査報告』
（福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集）福岡市教育委員会 1992

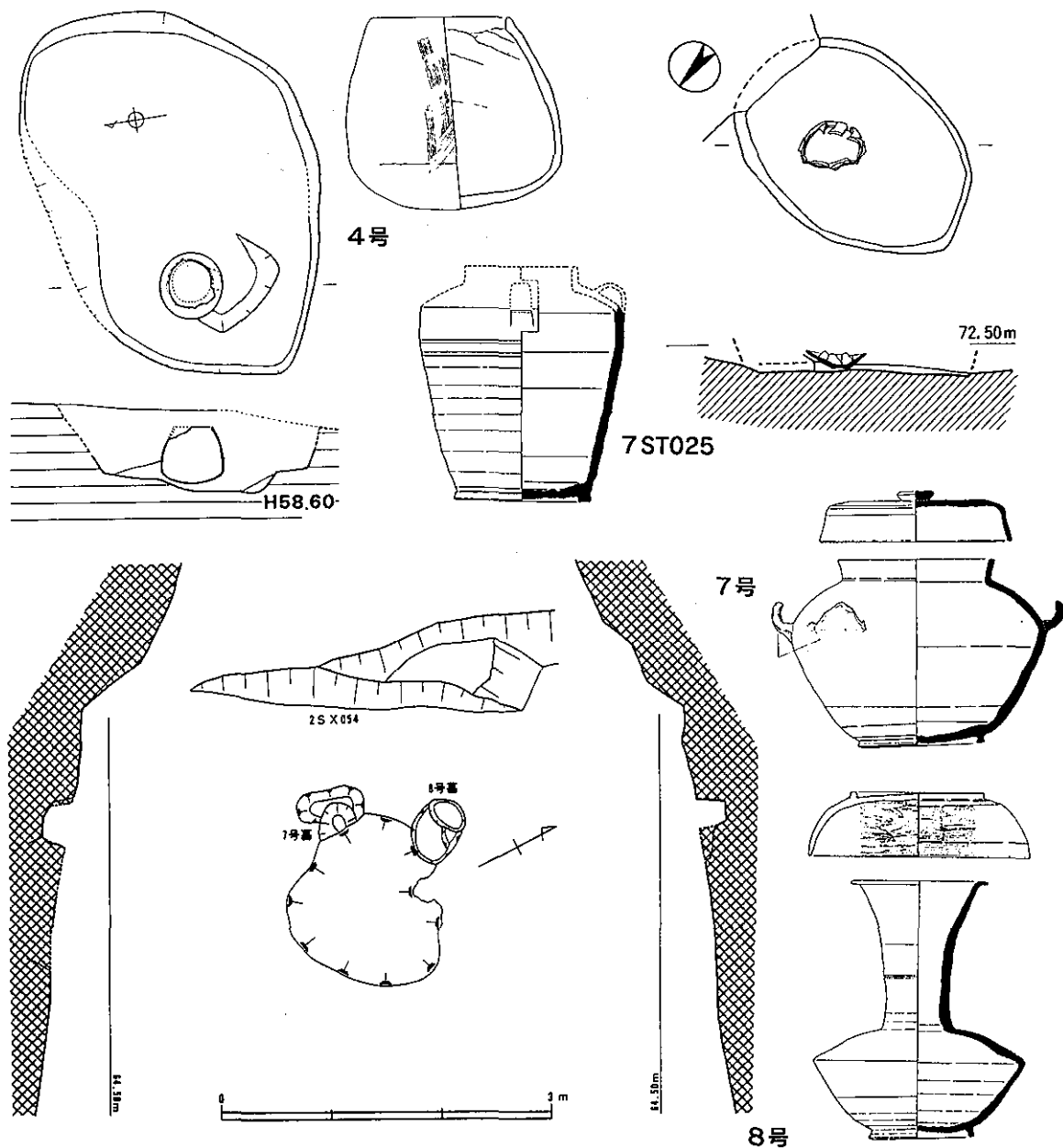
表2 短頸壺法量表

出土地点	法量 ①口径②器高 ③胴部最大径 ④底径 ⑤胴高指数		
牛頸井手窯跡群 38・39号窯灰原	① 11.6 ② 13.6 ③ 21.5 ④ 10.4 ⑤ 63.3	牛頸井手窯跡群 23~26号窯灰原 (2)	① 11.4 ② 15.3 ③ 20.6 ④ 11.5 ⑤ 74.2
牛頸井手窯跡群 3号窯灰原	③ 20.8 ④ 10.7	(3)	① 12.7 ② 20.6 ③ 25.5 ④ 15.3 ⑤ 80.8
大宰府史跡 S K4141	① 14.7 ② 21.9 ③ 28.8 ④ 7.0 ⑤ 76.3	(4)	① 15.4 ② 26.1 ③ 31.4 ④ 15.4 ⑤ 83.1
牛頸井手窯跡群 22・30~32号窯 灰原 (1)	① 12.0 ② 14.6 ③ 21.5 ④ 11.0 ⑤ 67.9	牛頸笹原窯跡群 51・52号窯灰原	① 11.8 ③ 23.8
(2)	① 10.2 ② 15.0 ③ 18.3 ④ 9.0 ⑤ 82.0	牛頸井手窯跡群 40~42号窯灰原	① 12.8 ② 14.8 ③ 19.6 ④ 10.0 ⑤ 75.5
牛頸井手窯跡群 23~26号窯灰原 (1)	① 9.2 ② 13.1 ③ 18.6 ④ 10.9 ⑤ 70.4	石勺遺跡J地点 1号火葬墓	① 14.0 ③ 28.3 ④ 12.2
		大宰府条坊跡 81 S K130	① 17.6 ② 22.9 ③ 30.4 ④ 16.3 ⑤ 75.5

表3 福岡県内出土火葬墓一覧表

遺 跡 名	所 在 地	文 献
石勺遺跡	大野城市曙町二丁目9-1	『石勺遺跡Ⅳ』（大野城市文化財調査報告書第56集） 大野城市教育委員会 1999
中桑野遺跡	築上郡新吉富村大字垂水字中桑野	『中桑野遺跡』（新吉富村文化財調査報告書第3集） 新吉富村教育委員会 1978
広幡城遺跡	築上郡椎田町大字水原653-1外	『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-9-』 福岡県教育委員会 1992
白岩遺跡	北九州市八幡西区大字香月字白岩	『白岩遺跡』（北九州市文化財調査報告書第17集） 北九州市教育委員会 1976
柳ヶ谷遺跡	鞍手郡若宮町大字水原字柳ヶ谷	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-Ⅷ-』 福岡県教育委員会 1977
都地原遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口字都地原	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-Ⅷ-』 福岡県教育委員会 1977
汐井掛遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口字汐井掛	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XⅩ-』 福岡県教育委員会 1978
茶臼山城跡	鞍手郡若宮町大字山口	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XⅥ-』 福岡県教育委員会 1977
浦谷古墳群	宗像市大字朝町字浦谷・給田	『浦谷古墳群』（宗像市文化財調査報告書第5集） 宗像市教育委員会 1982
宮地嶽火葬墓	宗像郡津屋崎町宮地嶽神社境内	『終末期古墳の世界-高松塚とその時代-』 北九州市立考古博物館 1993
松ノ尾古墳群	粕屋郡志免町大字吉原876-2外	『松ノ尾古墳群』（志免町文化財調査報告書第4集） 志免町教育委員会 1993
塔ノ尾遺跡	粕屋郡宇美町大字宇美字塔ノ尾1502	『塔ノ尾遺跡』 宇美町教育委員会 1981
宮ノ本遺跡	太宰府市大字向佐野字宮ノ本・長浦・日焼	『宮ノ本遺跡』（太宰府市の文化財第3集） 太宰府町教育委員会 1980 『宮ノ本遺跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第10集） 太宰府市教育委員会 1987 『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ』（太宰府市の文化財第21集） 太宰府市教育委員会 1993
篠振遺跡	太宰府市大字吉松字篠振305-1外	『篠振遺跡』（太宰府市の文化財第11集） 太宰府市教育委員会 1987
結ヶ浦火葬墓	太宰府市大字太宰府字結ヶ浦	渡辺正気『和銅銭副葬の一蔵骨器』 『九州考古学』第1号 九州考古学会 1957
花見ヶ丘火葬墓	太宰府市大字太宰府	『白濁遺跡』 大分県佐伯市教育委員会 1958
米喰火葬墓	筑紫野市大字二日市字米喰74-4	『通り浦・剣塚遺跡』（筑紫野市文化財調査報告書第10集） 筑紫野市教育委員会 1984
峯火葬墓	筑紫野市大字紫字峯557-3	『通り浦・剣塚遺跡』（筑紫野市文化財調査報告書第10集） 筑紫野市教育委員会 1984

唐人塚遺跡	筑紫野市大字杉原	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XⅦ－』 福岡県教育委員会 1977
池の上墳墓群	甘木市大字堤字池の上	『池の上墳墓群』（甘木市文化財調査報告第5集） 甘木市教育委員会 1979
古寺墳墓群	甘木市大字菩提寺字古寺・後牟田	『古寺墳墓群』（甘木市文化財調査報告第14・15集） 『古寺墳墓群Ⅱ』 甘木市教育委員会 1982・1983
菩提寺古寺古墳群	甘木市大字菩提寺字古寺	『菩提寺古寺古墳群』（福岡県文化財調査報告書第96集） 福岡県教育委員会 1992
治部ノ上遺跡	朝倉郡朝倉町大字入地字治部ノ上2645外	『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－32－』 福岡県教育委員会 1994
大迫遺跡	朝倉郡朝倉町大字山田字大迫493-1外	『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－24－』 福岡県教育委員会 1992
山田遺跡群	朝倉郡朝倉町大字山田字平川・長田・浦山	『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－23－』 福岡県教育委員会 1992
横隈狐塚遺跡	小郡市横隈字狐塚365-1外	『横隈狐塚遺跡Ⅲ』（小郡市文化財調査報告書第29集） 小郡市教育委員会 1986
津古土取遺跡	小郡市大字津古字土取	『津古土取遺跡』（小郡市文化財調査報告書第59集） 小郡市教育委員会 1990
津古中契遺跡	小郡市大字津古字中2444、249-1	『津古中契遺跡』（小郡市文化財調査報告書第33集） 小郡市教育委員会 1986
永浦遺跡	小郡市刈又三沢字永浦	『刈又地区遺跡群Ⅰ』（小郡市文化財調査報告書第101・103集） 『刈又地区遺跡群Ⅱ』 小郡市教育委員会 1995
勝負坂遺跡	小郡市刈又三沢字勝負坂	『刈又地区遺跡群 平成4年度調査概要』 （小郡市文化財調査報告書第88集）小郡市教育委員会 1994
西谷火葬墓群	久留米市山本町大字豊田字西谷	『西谷火葬墓群』（久留米市文化財調査報告書第3集） 久留米市教育委員会 1971
下見遺跡	久留米市東合川町字下見	『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告第1集』 久留米市教育委員会 1981
ヘボノ木遺跡	久留米市東合町	『東部土地区画整理事業関係 埋蔵文化財調査報告第1・3・7・9集』 久留米市教育委員会 1981・1984・1988・1990
鈴ヶ山古墳群	八女郡広川町大字新代字鈴ヶ山1279外	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅲ－』 福岡県教育委員会 1972
清水山古墳群	山門郡瀬高町大字本吉字清水谷	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XⅣ－』 福岡県教育委員会 1977
萩浦立岩墳墓群	前原市大字萩浦字立岩	『萩浦の文化財』（前原町萩浦地区土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財包蔵地発掘調査の速報1） 前原町教育委員会 1992
穴ヶ葉山遺跡	築上郡大平村大字下唐原	『穴ヶ葉山遺跡』（大平村文化財調査報告書第8集） 大平村教育委員会 1993



宮ノ本遺跡

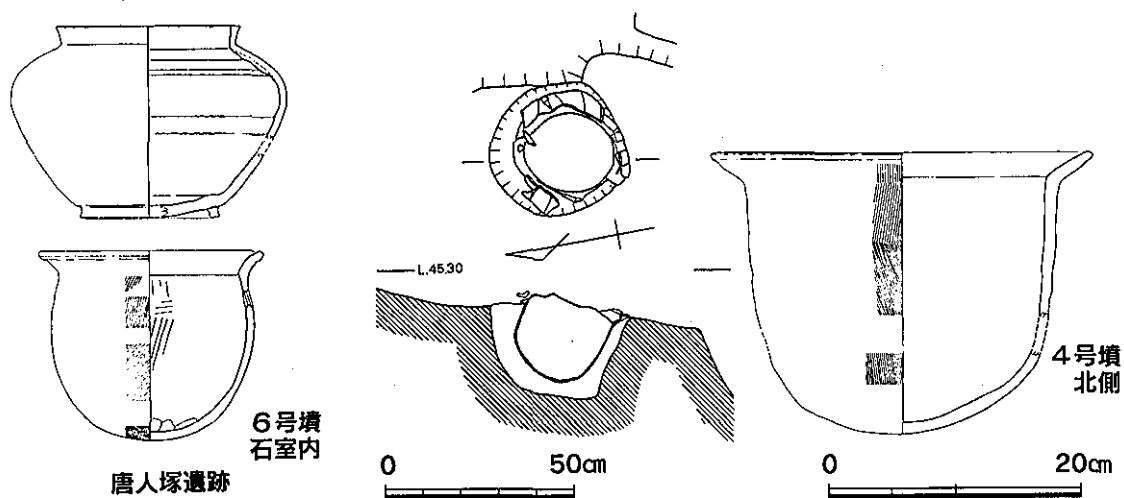


図16 宮ノ本遺跡・唐人塚遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況は1/20・実測図は1/6）

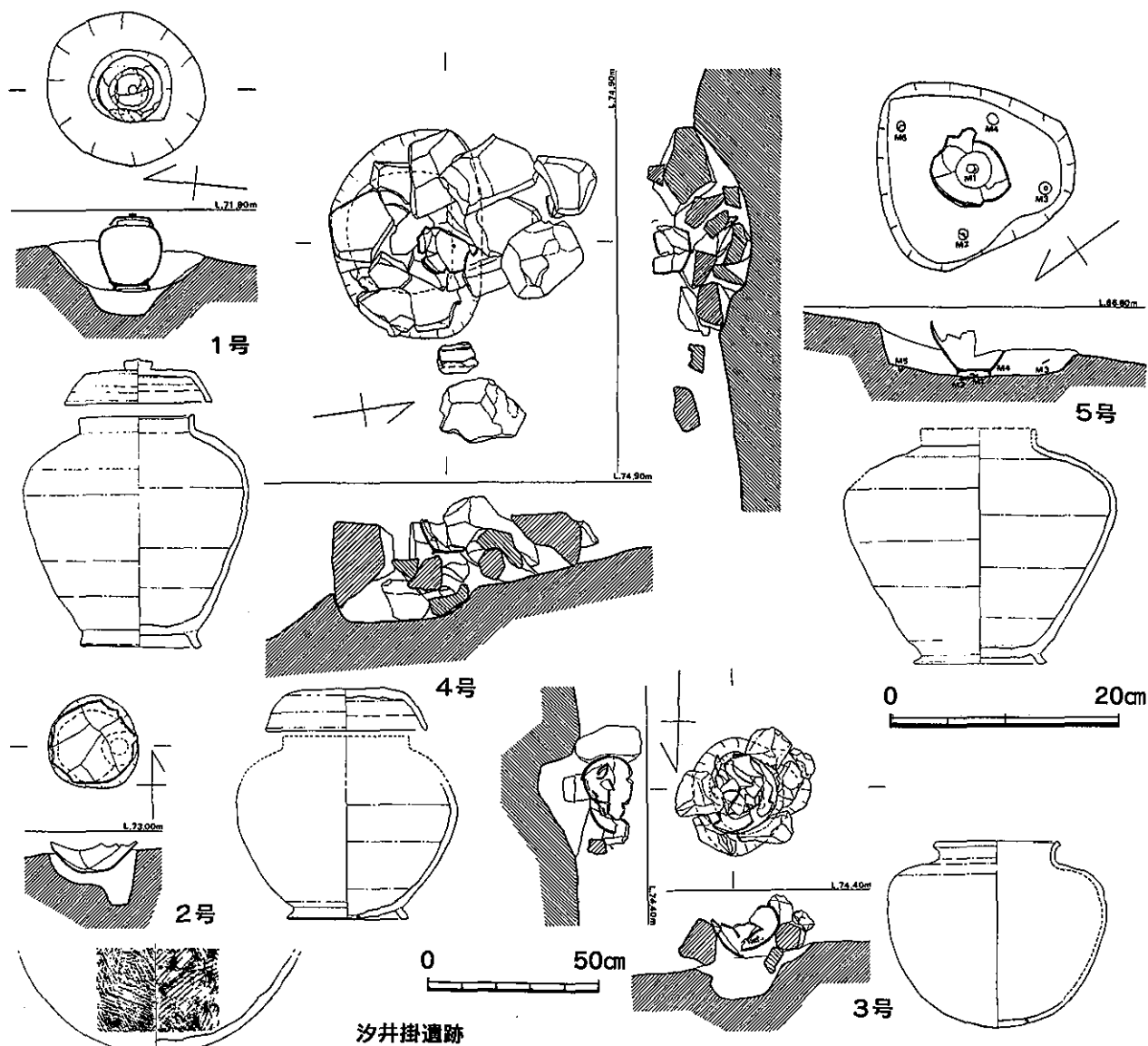
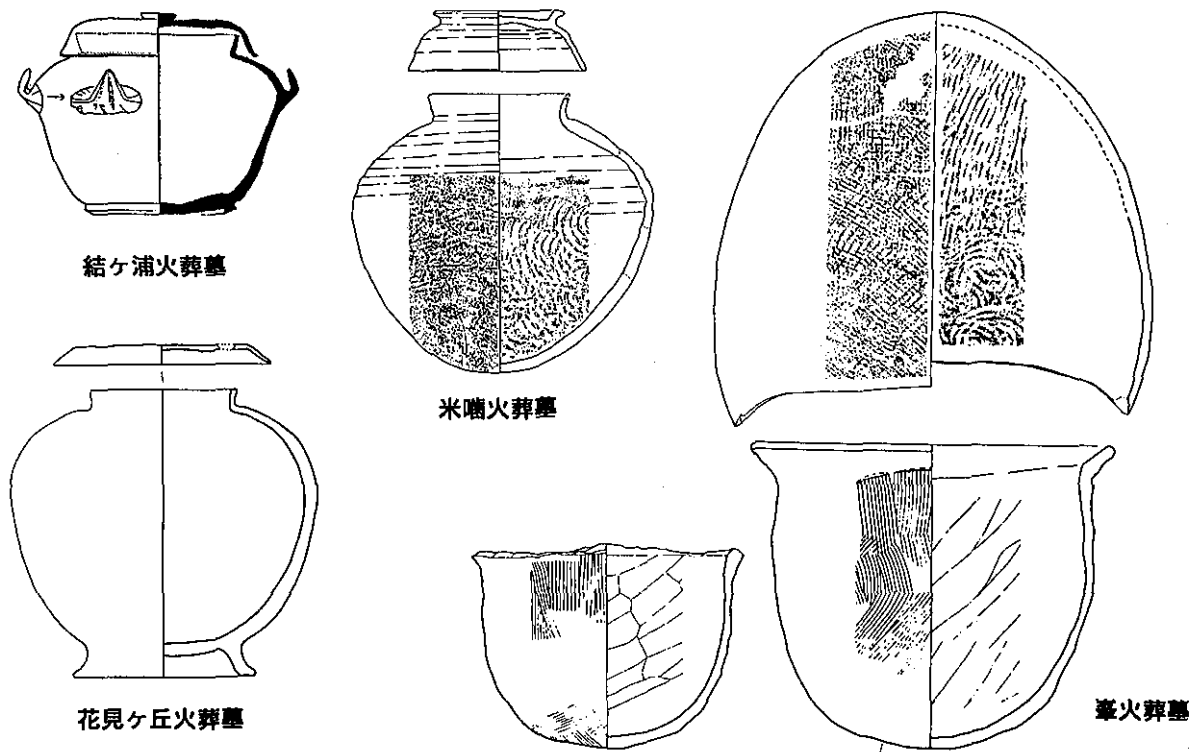


図17 結ヶ浦・花見ヶ丘・米嚙・峯火葬墓蔵骨器実測図、汐井掛遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図
(出土状況は1/20・実測図は1/6)

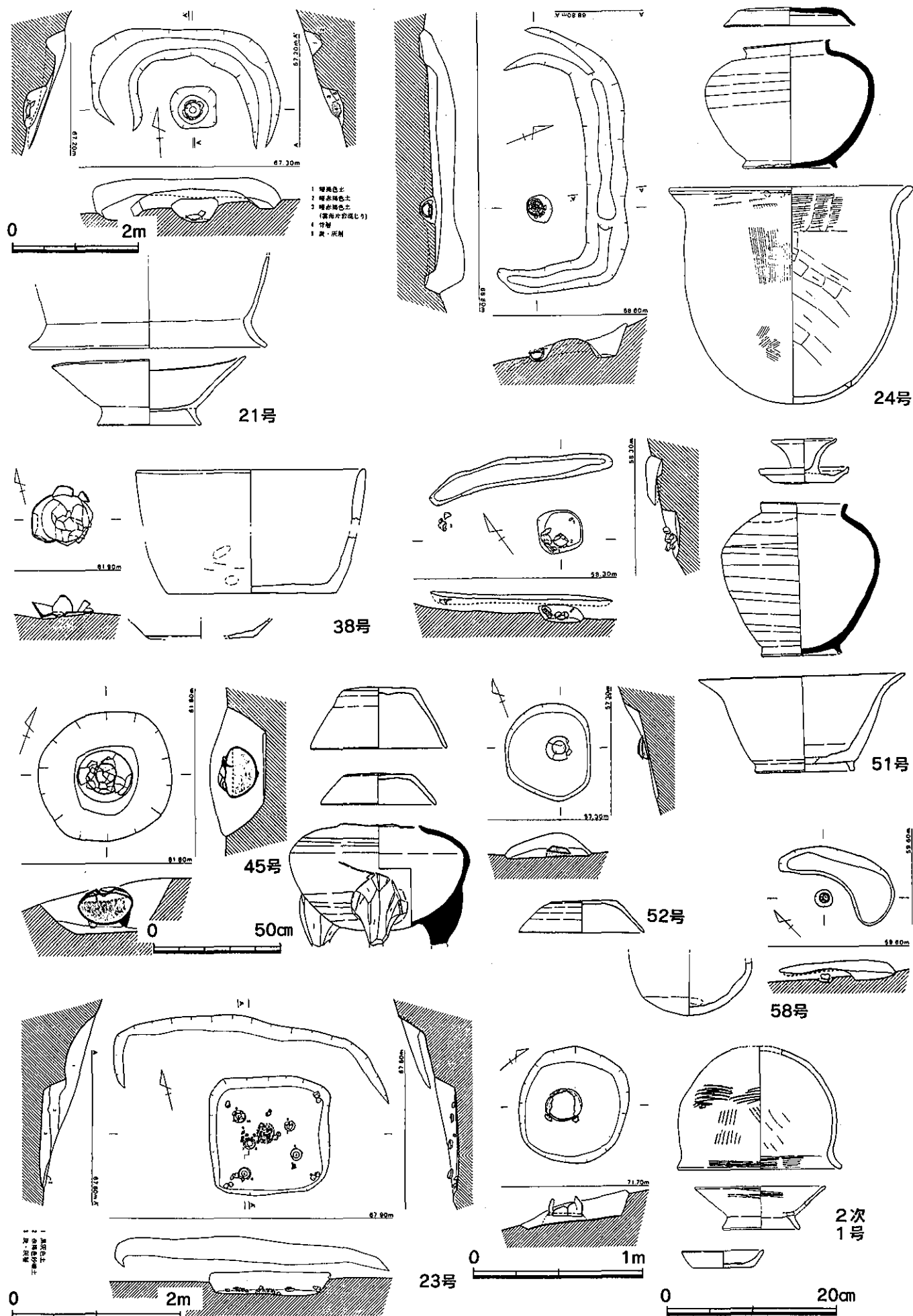
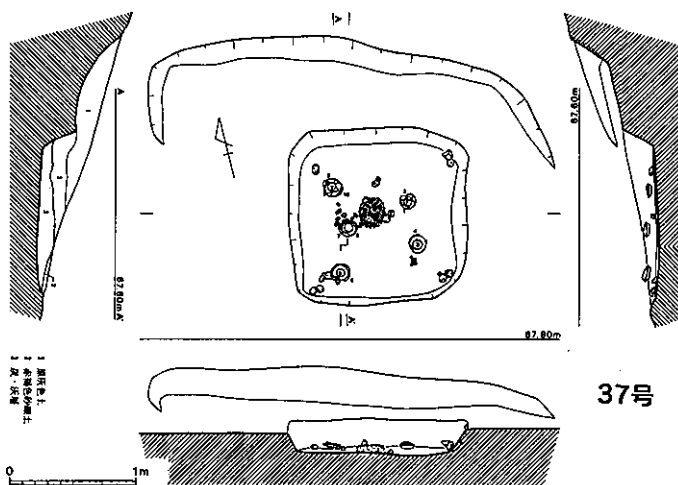
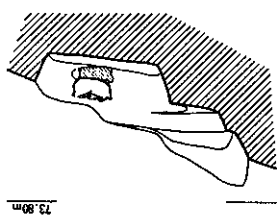


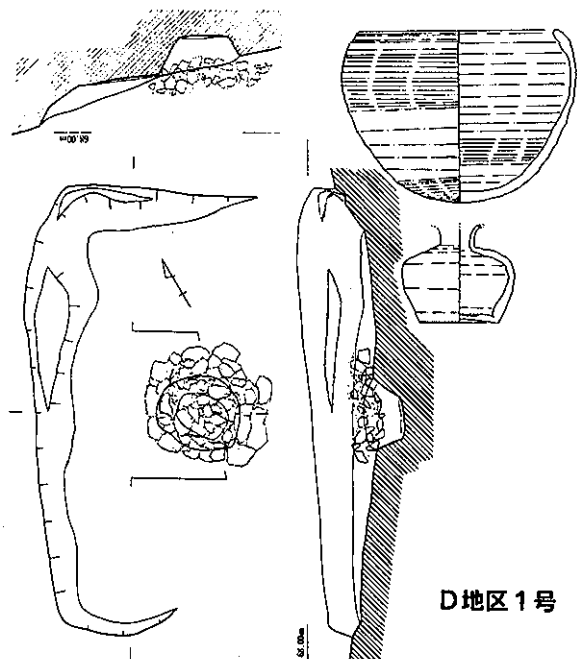
図18 大迫遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況21・24・51号は1/80、23号は1/60、52・2次1号は1/30、38・45・58号は1/20・実測図は1/6）



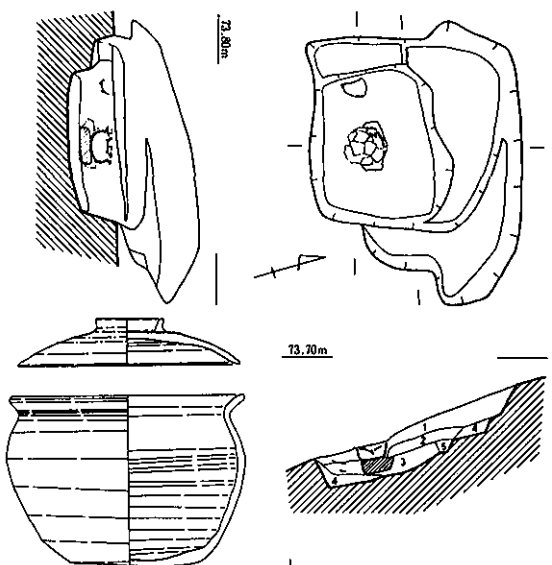
大迫遺跡



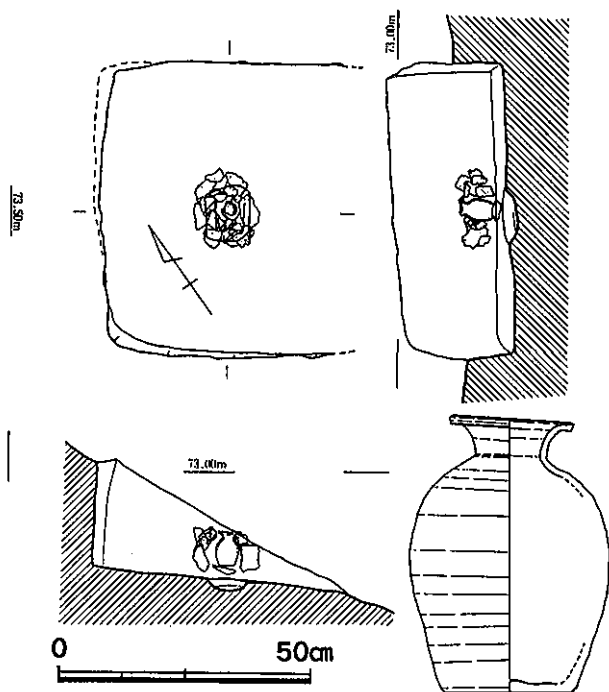
37号



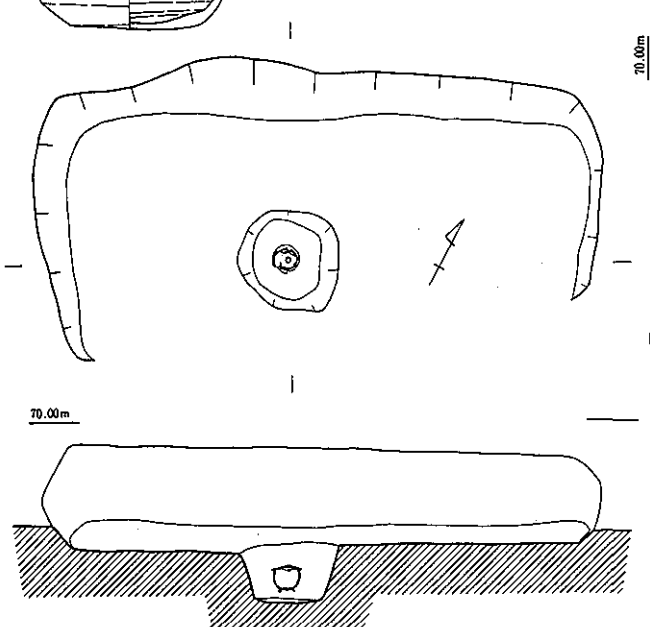
D地区1号



B地区1号



C地区1号



永浦遺跡

D地区2号

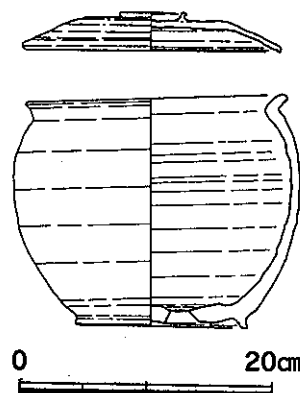


図19 大迫遺跡・永浦遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況は1/60・実測図は1/6）

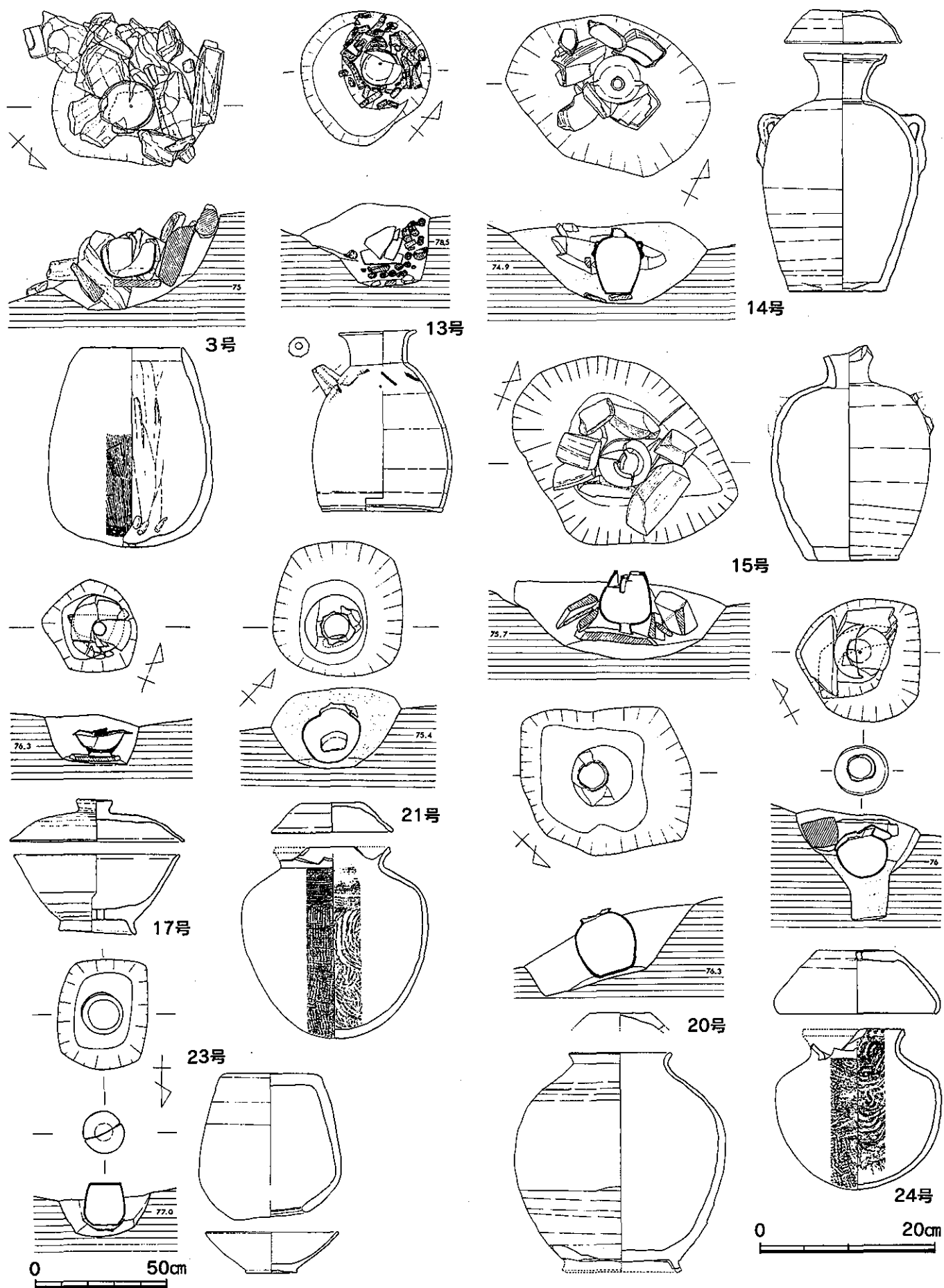


図20 池の上墳墓群火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況は1/20・実測図は1/6）

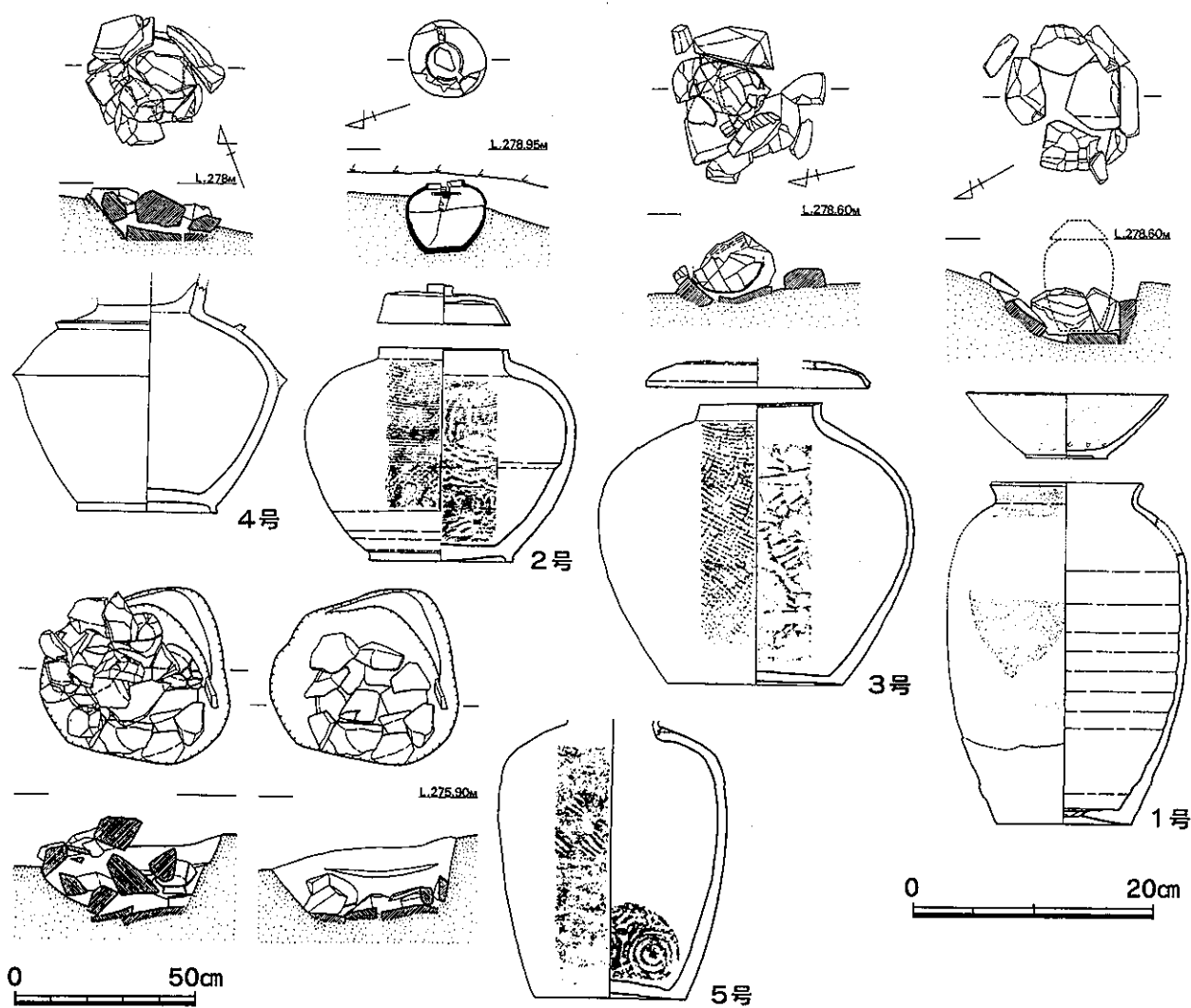


図22 西谷火葬墓群火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況は1/20・実測図は1/6）

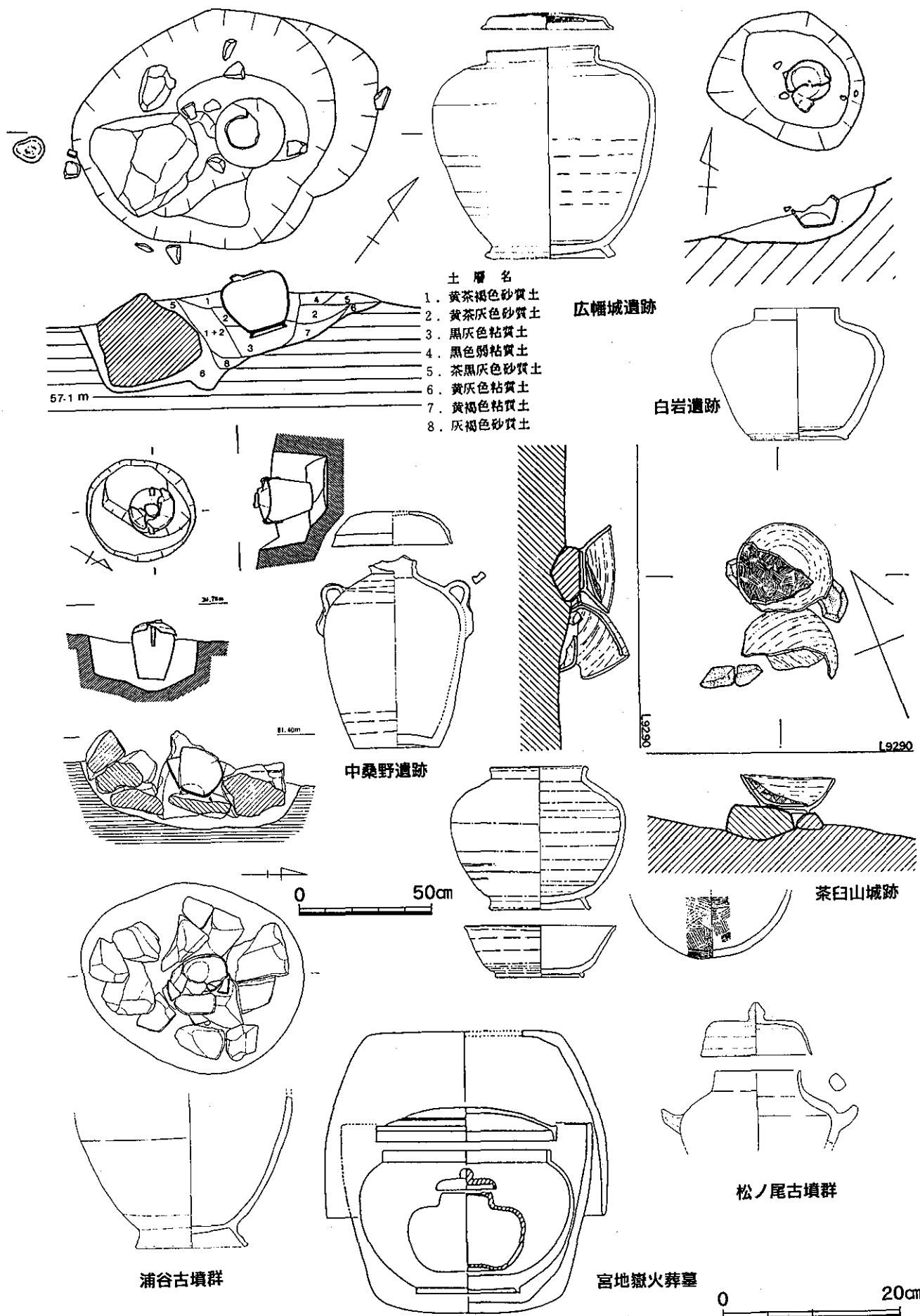


図23 広幡城遺跡・白岩遺跡・中桑野遺跡・茶臼山城跡・浦谷古墳群・宮地嶽火葬墓
松ノ尾古墳群火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況は1/20・実測図は1/6）

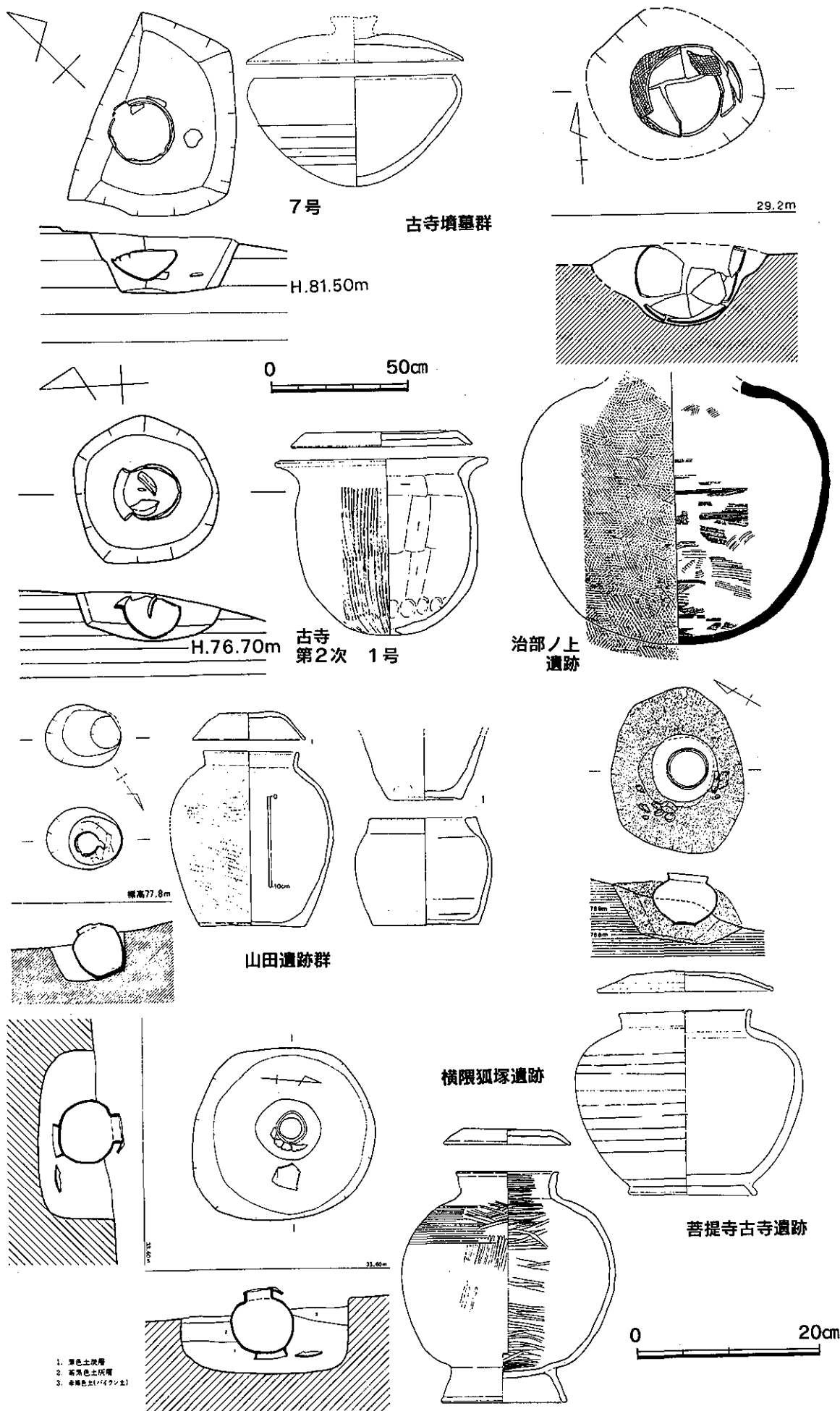


図24 古寺墳墓群・治部ノ上遺跡・山田遺跡群・横隈狐塚遺跡・菩提寺古寺遺跡火葬墓出土状況・
-31- 蔵骨器実測図 (出土状況は1/20・実測図は1/6)

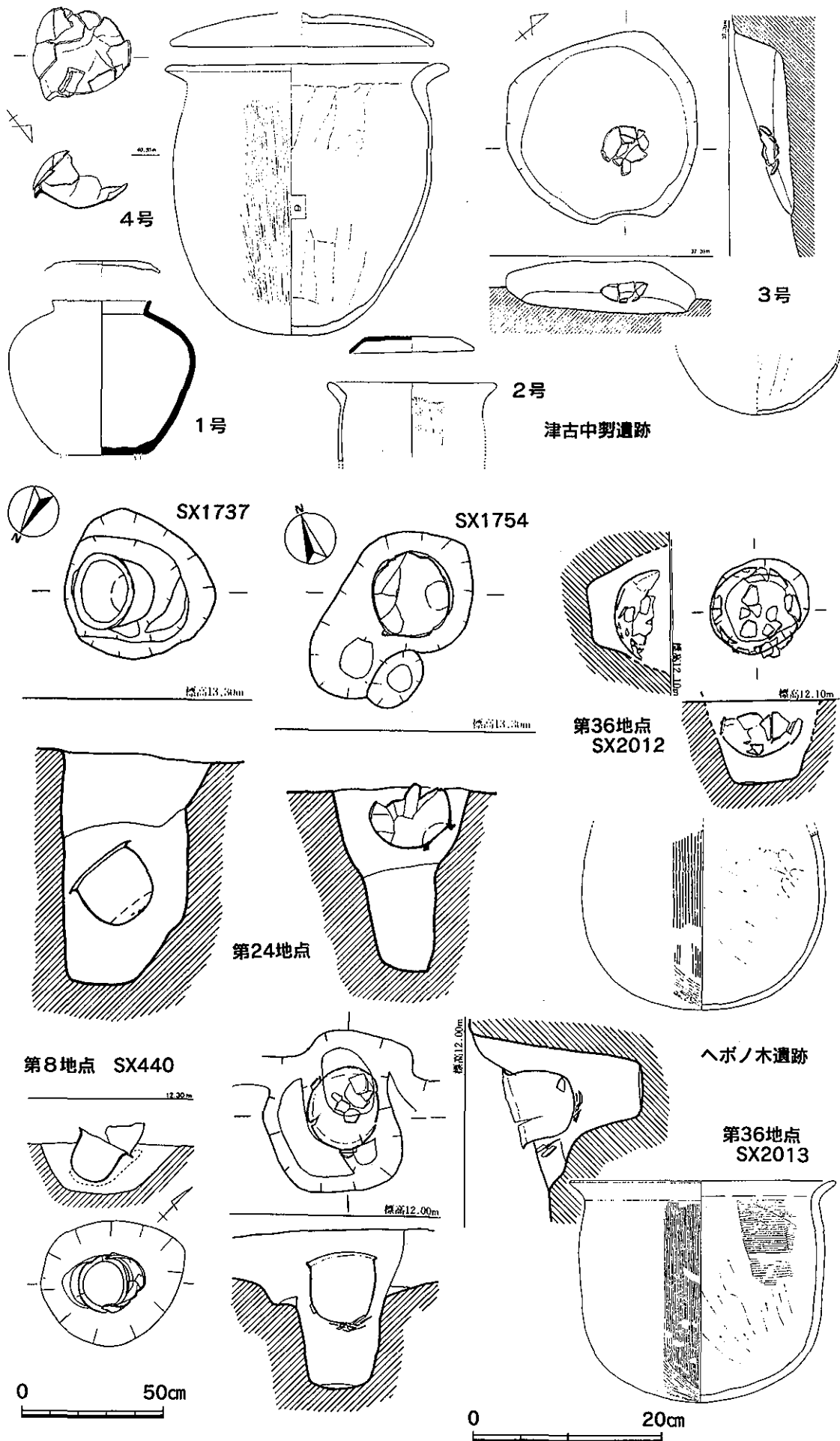


図25 津古中剪遺跡・へボノ木遺跡・火葬墓出土状況・蔵骨器実測図
(出土状況は1/20・実測図は1/6)

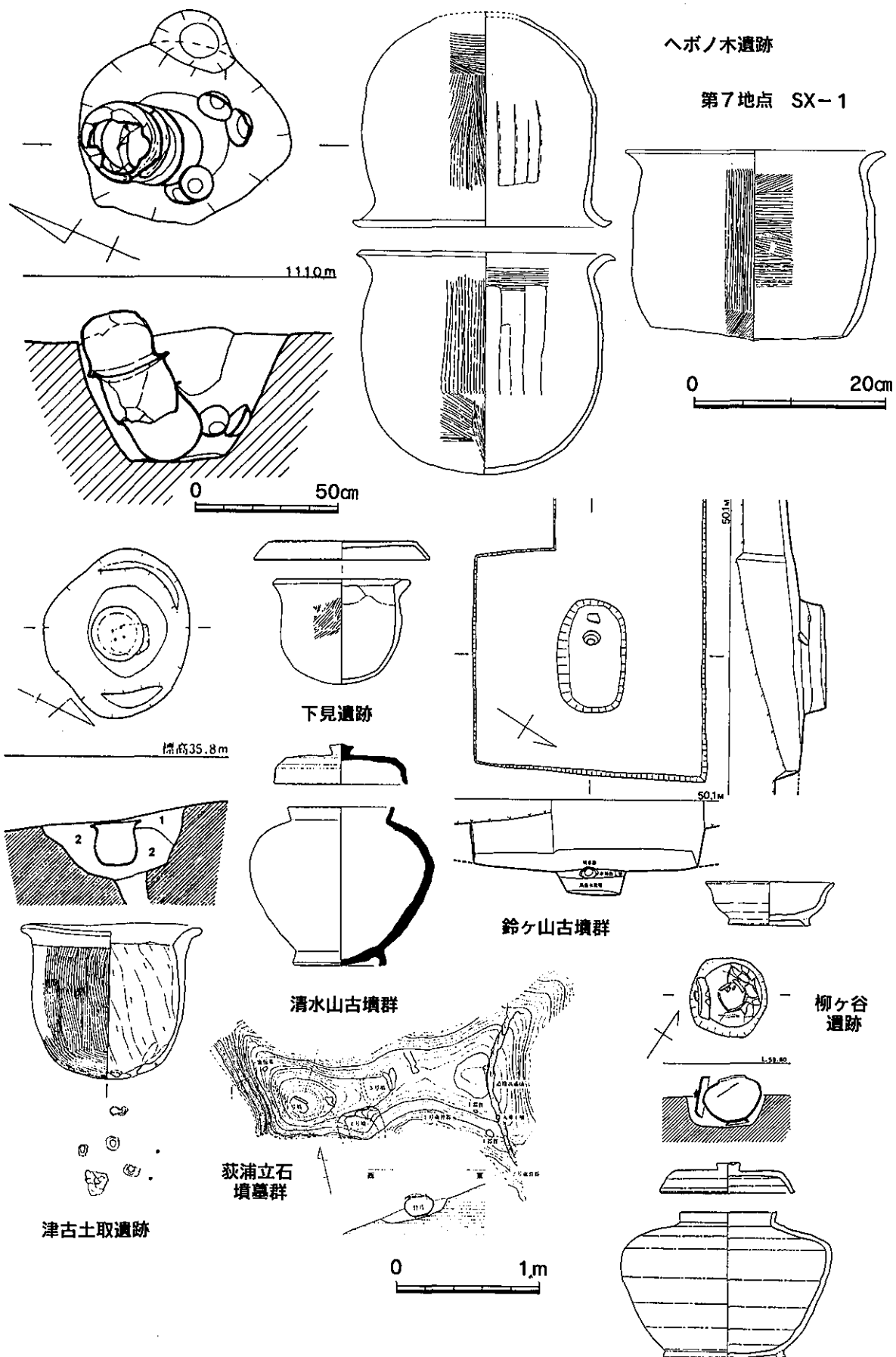


図26 ヘボノ木遺跡・下見遺跡・津古土取遺跡・清水山古墳群・荻浦立石墳墓群・鈴ヶ山古墳群・柳ヶ谷遺跡火葬墓出土状況・蔵骨器実測図（出土状況は1/20・1/40・実測図は1/6）

表4 火葬墓出土蔵骨器一覧表

遺跡名	遺構名	蔵骨器の種類	法量①口径②器高 ③胴部最大径④底 径⑤胴高指数	特徴	埋葬 状況
宮ノ本遺跡	4号	土師器 無頸壺	①10.0 ②10.7		正立
	7号	須恵器 短頸壺 須恵器 蓋	①13.6 ②16.4 ③22.3 ⑤73.5 ①16.7 ②4.5		正立
	8号	土師器 碗(蓋) 須恵器 長頸壺	①19.4 ②5.7 ①11.9 ②22.8 ③18.3		正立
	7 S T 025	須恵器 双耳壺	④11.9	肩部から上部欠損	正立
唐人塚遺跡	6号墳	須恵器 短頸壺 土師器 甕	①14.9 ②15.5 ③22.2 ⑤69.8 ①10.8 ②15.2 ③16.9	口縁部下に焼成後の両 面穿孔	
	4号墳 北側	土師器 甕	①30.3 ②22.5	上甕を欠損	正立
結ヶ浦火葬墓		須恵器 短頸壺 蓋	①13.0 ②14.3 ③19.7 ⑤72.6 ①15.8 ②3.5	銅銭を副葬	
花見ヶ丘 火葬墓		須恵器 短頸壺 須恵器 皿(蓋)			
米喰火葬墓		須恵器 短頸壺 須恵器 杯(蓋)	①11.2 ②22.2 ③23.8 ①14.0 ②4.8	口縁部打ち欠き	
峯火葬墓		外容器 土師器 甕 須恵器 甕(蓋) 内容器 土師器 甕	①21.6 ②16.3 ③34.7 ③34.7	口縁部打ち欠き	
汐井掛遺跡	1号	須恵器 短頸長胴 壺 蓋	①10.0 ②20.2 ③19.6 ④10.5 ①12.9 ②3.9		正立
	2号	須恵器 甕			正立
	3号	須恵器 短頸壺 須恵器 杯	③19.4 ④10.7 ①14.0 ②3.6	底部穿孔	正立
	4号	須恵器 短頸壺	①10.5 ②16.3 ③19.1 ⑤85.3	底部穿孔	正立
	5号	須恵器 壺	③24.0		正立
都地原遺跡	1号	須恵器 甕	①19.2 ②30.8 ③28.3		正立
	2号	須恵器 短頸壺 蓋	①11.8 ②15.8 ③21.6 ⑤73.1 ①15.4 ②3.4	高台打ち欠き	正立
	3号	土師器 甕	①22.5 ②20.2	底部穿孔	正立

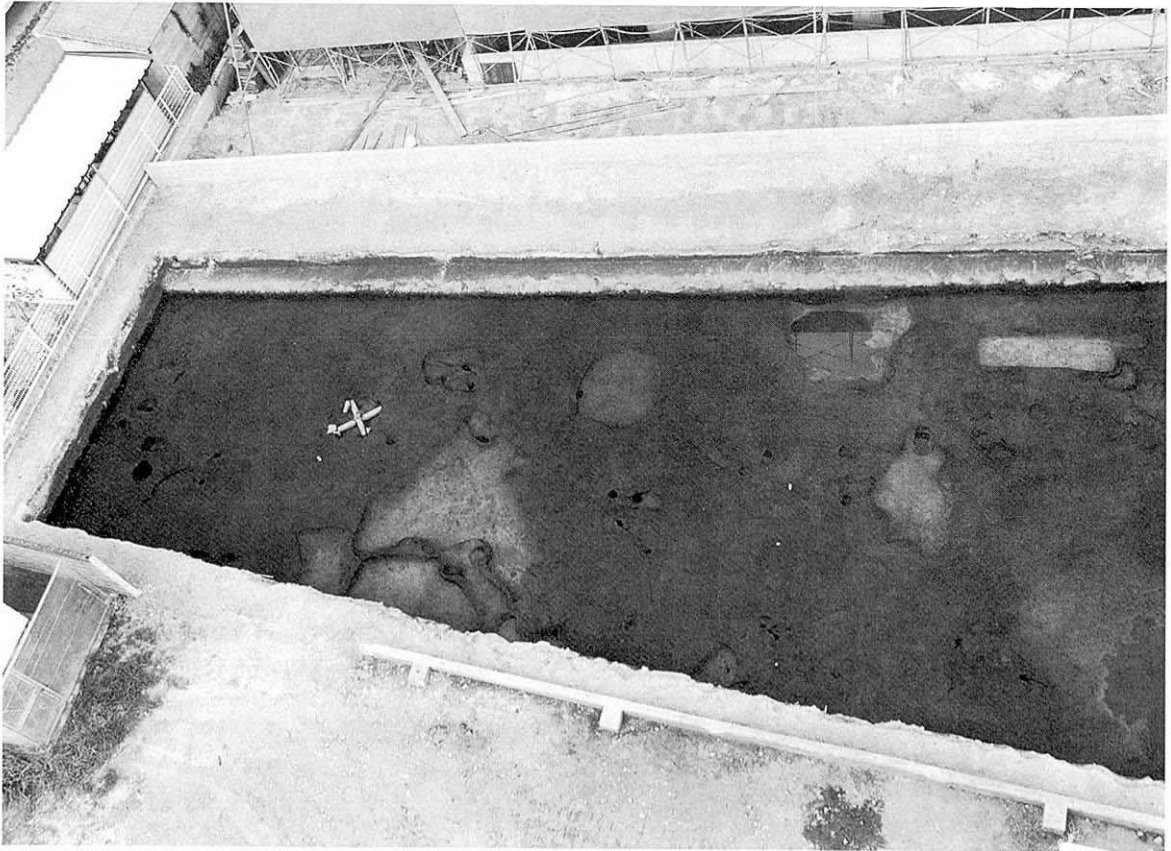
遺跡名	遺構名	蔵骨器の種類	法量①口径②器高 ③胴部最大径④底 径⑤胴高指数	特徴	埋葬 状況
都地原遺跡	4号	土師器 杯	①16.8 ②5.3		倒立
柳ヶ谷遺跡		須恵器 短頸壺 蓋	①10.2 ②15.5 ③22.0 ⑤70.5 ①14.2 ②3.2	短頸壺内に鉄刀子副葬	正立
大迫遺跡	21号	土師器 甕 土師器 杯	①27.5 ①22.5 ②7.9		倒立
	24号	外容器 土師器 甕 内容器 須恵器 短頸壺 須恵器 皿(蓋)	①28.2 ②25.4 ①10.3 ②15.0 ③20.0 ⑤75.0 ①5.5 ②2.2	底部穿孔	正立
	38号	土師器 鉢	④19.8		正立
	45号	須恵器 三足付 短頸壺 土師器 杯(外蓋) 土師器 杯(内蓋)	①15.6 ②7.1 ④8.6 ①13.2 ②3.7 ④8.1	口縁部・脚部打ち欠き	正立
	51号	須恵器 短頸壺 土師器 皿(蓋)	①10.2 ②18.0 ③18.6 ⑤96.8 ②5.2		
	52号	土師器 杯(蓋)	①14.9 ②3.8 ④8.0		
	58号	土師器 丸底甕			
	2次 1号	土師器 甕 土師器 杯	①19.5 ②14.2 ①15.4 ②9.2		倒立
	3号	土師器 無頸壺	①11.6 ②22.75 ③18.8	底部穿孔	正立
	13号	白釉緑彩 水注	①8.7 ②20.8 ③16.05 ④13.7	底部穿孔	正立
池の上墳墓群	14号	須恵器 双耳壺 土師器 杯(蓋)	①9.3 ②27.2 ④11.1 ①13.3 ②3.8 ④7.8		正立
	15号	須恵器 双耳壺	②24.5 ④10.5	口縁部・底部・耳 打ち欠き 刀子副葬	倒立
	17号	土師器 杯蓋 土師器 杯	①19.0 ②8.7~9.2 ①20.0 ②4.85	底部穿孔	正立
	18号	土師器 鉢	①32.3 ②10.5		倒立
	20号	須恵器 壺 土師器 杯(蓋)	①11.8 ②24.6 ④6.9	高台打ち欠き 刀子棺内副葬	正立

遺跡名	遺構名	蔵骨器の種類	法量①口径②器高 ③胴部最大径④底 径⑤胴高指数	特徴	埋葬 状況
池の上墳墓群	21号	須恵器 壺 土師器 杯(蓋)	① 12.9 ② 21.3 ③ 21.3 ① 13.9 ② 3.4 ④ 7.1	口縁部打ち欠き	正立
	23号	越州窯系青磁 碗 須恵器 瓶	① 15.3 ② 4.7 ④ 5.7 ④ 10.4	口縁部打ち欠き	倒立
	24号	須恵器 壺 土師器 鉢(蓋)	① 11.3 ② 19.0 ① 17.9 ② 8.6	口縁部打ち欠き 底部穿孔	正立
	27号	土師器 無頸壺	① 13.2 ② 11.3 ④ 9.8		正立
	31号	須恵器 短頸壺	① 9.7 ② 16.2 ③ 19.4 ⑤ 83.5	刀子棺内副葬	正立
	32号	外容器 土師器 甕 内容器 土師器 無頸壺 土師器 蓋	① 27.1 ② 26.0 ① 13.1 ② 18.4 ③ 18.6 ① 18.1 ② 5.2	底部穿孔	正立
	33号	土師器 鉢	① 21.1 ② 10.15	底部穿孔	正立
	35号	須恵器 杯	① 15.6 ② 1.9 ④ 12.6		倒立
	36号	須恵器 短頸壺	① 12.5	高台打ち欠き	正立
永浦遺跡	B地点 1号	土師器 甕 土師器 高台付皿	① 17.4 ② 13.5 ① 17.4 ② 3.9		正立
	C地点 1号墓	須恵器 壺	① 9.8 ② 22.0 ③ 15.8		正立
	D地点 2号	土師器 甕 須恵器	① 20.5 ② 17.9 ③ 13.8 ① 20.5	底部穿孔	正立
西谷火葬墓群	1号	越州窯系青磁 壺	① 12.7 ③ 19.6	底部穿孔	正立
	2号	須恵器 短頸壺 須恵器 蓋	① 10.8 ② 17.9 ③ 22.6 ⑤ 79.2 ① 11.2 ② 3.9		正立
	3号	土師器 壺形瓶 土師器 皿(蓋)	① 18.4 ② 17.5 ③ 22.4 ① 12.2 ② 2.6	底部に5つの穿孔	正立
	6号	土師器 深鉢	① 19.0 ② 16.9		正立
下見遺跡		土師器 甕 土師器 皿	① 14.4 ② 10.1 ① 18.6 ② 2.0 ④ 15.6		
清水山古墳群		須恵器 短頸壺 須恵器 蓋	① 11.2 ② 16.8 ① 6.7 ② 2.4		

遺跡名	遺構名	蔵骨器の種類	法量①口径②器高 ③胴部最大径④底 径⑤胴高指数	特徴	埋葬 状況
中桑野遺跡		須恵器 双耳壺 土師器 杯(蓋)	③ 16.0 ④ 9.6 ① 14.0 ② 3.9	口縁部打ち欠き	正立
広幡城遺跡		須恵器 短頸壺 土師器 皿(蓋)	① 12.7 ② 23.9 ③ 25.0 ⑤ 95.6 ① 14.9 ② 1.8		正立
白岩遺跡		須恵器 短頸壺	① 9.5 ② 15.3 ③ 19.3 ⑤ 79.3		正立
茶臼山城跡		須恵器 短頸壺 須恵器 杯(蓋)	① 11.1 ② 16.2 ③ 19.7 ⑤ 82.2 ① 17.2 ② 5.9 ④ 10.0		倒立
浦谷古墳群		土師質 甕			正立
宮地嶽火葬墓		外容器 陶製深鉢(身) (蓋) 銅製有蓋短頸壺 (蓋) 内容器 玻璃製有蓋壺 (蓋)	① 27.7 ② 21.6 ① 28.0 ② 20.7 ④ 21.8 ① 19.5 ② 17.0 ③ 24.9 ① 21.3 ② 4.1 ① 5.7 ② 9.3 ① 6.5 ② 2.6		
松ノ尾古墳群		土師器 壺 土師器 蓋	① 9.2 ③ 17.6 ① 12.6 ② 6.0	把手が付く	
古寺墳墓群	1号	土師器 甕 土師器 大皿(蓋)	① 23.3 ② 19.4 ① 19.4 ② 1.6	底部穿孔	正立
	7号	須恵器 鉢 土師器 蓋	① 22.0 ② 12.0 ① 23.8		正立
菩提寺 古寺古墳群		須恵器 短頸壺 須恵器 杯(蓋)	① 17.7 ② 20.3 ③ 25.0 ⑤ 81.2 ① 19.3 ② 2.3		正立
治部ノ上遺跡		須恵器 丸底壺	③ 33.9		正立
山田遺跡群	1号	須恵器 壺 土師器 杯(蓋)	① 10.6 ② 19.3 ③ 17.8 ④ 11.5 ① 12.4 ② 3.2		正立
	2号	須恵器	④ 8.0		
	3号	土師器 壺	① 11.8 ② 11.8 ③ 15.0 ④ 11.6		
横隈狐塚遺跡		黒色土器高台付壺 土師器 皿(蓋)	① 11.2 ② 25.5 ③ 23.7 ① 13.9 ② 1.75 ④ 9.7	鏡片3点 鉄器5点	正立
津古土取遺跡		土師器 甕	① 18.9 ② 16.4	底部穿孔	正立

遺跡名	遺構名	蔵骨器の種類	法量①口径②器高 ③胴部最大径④底 径⑤胴高指数	特徴	埋葬 状況
津古中野遺跡	1号	須恵器 短頸壺 土師器 皿(蓋)	① 10.6 ② 15.7 ③ 20.0 ⑤ 78.5	高台打ち欠き	
	2号	土師器 甕 須恵器 皿	① 19.4 ① 13.6 ② 1.7		倒立
ヘボノ木遺跡	第7地点 SX1	土師器 甕 土師器 甕 土師器 甕(蓋)	① 22~23 ② 22.5~23.4	底部打ち欠き	正立
	第8地点 SX1	土師器 甕 土師器 甕(蓋)	① 19.3 ② 14.9 ① 20.0 ② 16.0		正立
	SX 1737	土師器 甕			正立
	SX 1754	須恵器 短頸壺			正立
	SX 2012	土師器 甕	③ 26.0		正立
	SX 2013	土師器 甕	① 28.6 ② 23.6		正立
穴ヶ葉山遺跡	1号	須恵器 短頸壺 須恵器 杯蓋(蓋)	① 9.4 ② 13.5 ③ 17.0 ④ 7.6 ⑤ 79.4 ① 13.1 ② 2.1		正立
	3号	須恵器 壺 須恵器 杯身(蓋)	① 6.6 ② 10.4 ③ 13.2 ④ 8.6 ① 8.8 ② 2.7 ④ 6.1		正立
	4号	須恵器 短頸壺	① 7.9 ② 13.2 ③ 15.6 ④ 8.9 ⑤ 84.6		正立

版 图



(1) 北東部完掘状況（南西から）①



(2) 北東部完掘状況（南西から）②



(1) 北西部完掘状況（南西から）①



(2) 北西部完掘状況（南東から）②



(1) 南部完掘状況（北東から）



(2) 1号火葬墓蔵骨器出土状況（南東から）



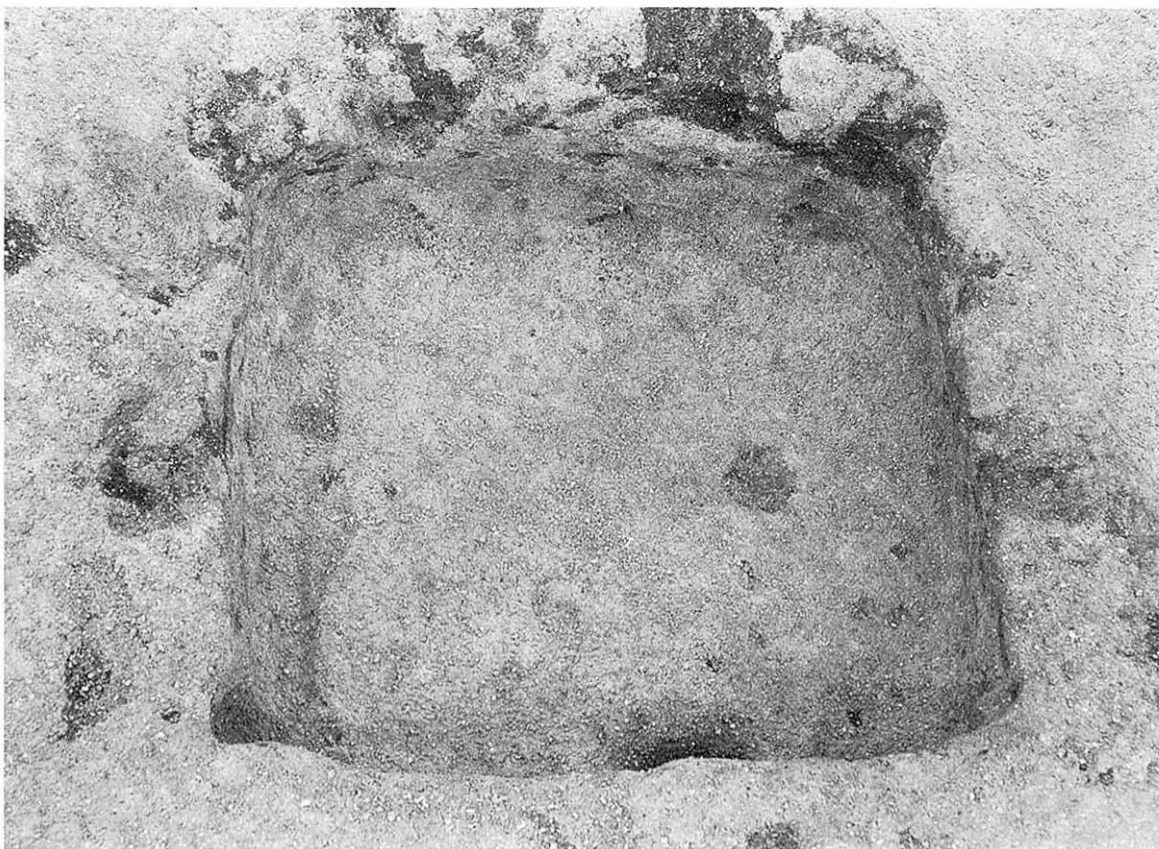
(1) 1号火葬墓埋土土層（南東から）



(2) 1号火葬墓火葬骨出土状況（南東から）



(3) 1号火葬墓遺物出土状況（南東から）



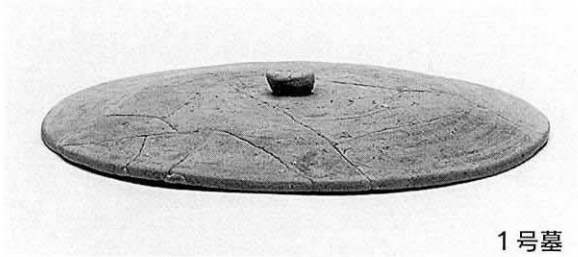
(1) 1号火葬墓完掘状況（南東から）



(2) 1～3号溝完掘状況（南西から）



(3) 3号溝埋土土層（南西から）



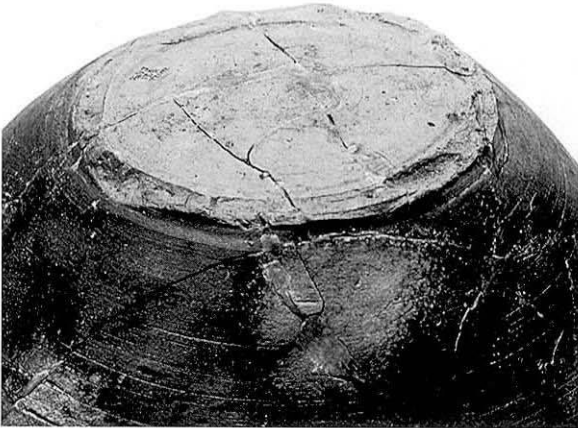
1号墓



1号墓



1号墓



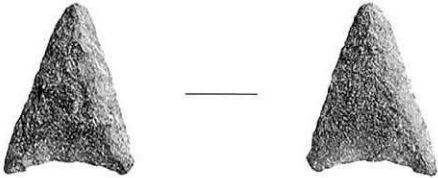
出土遺物



SP16



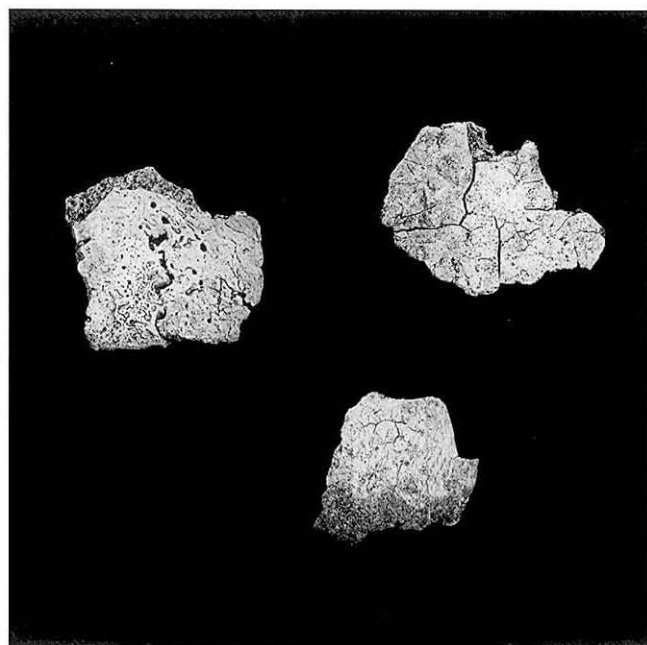
カクラン



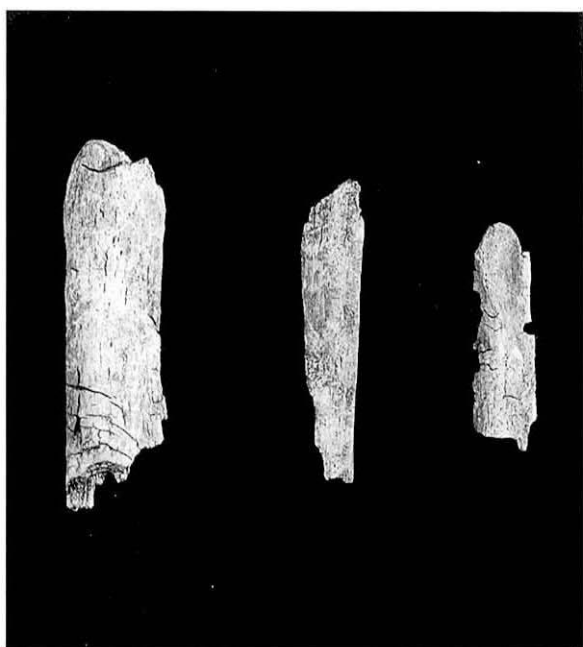
SX04



頭蓋骨片・歯牙片（1面）



頭蓋骨片（5面）



上肢骨片（2面）

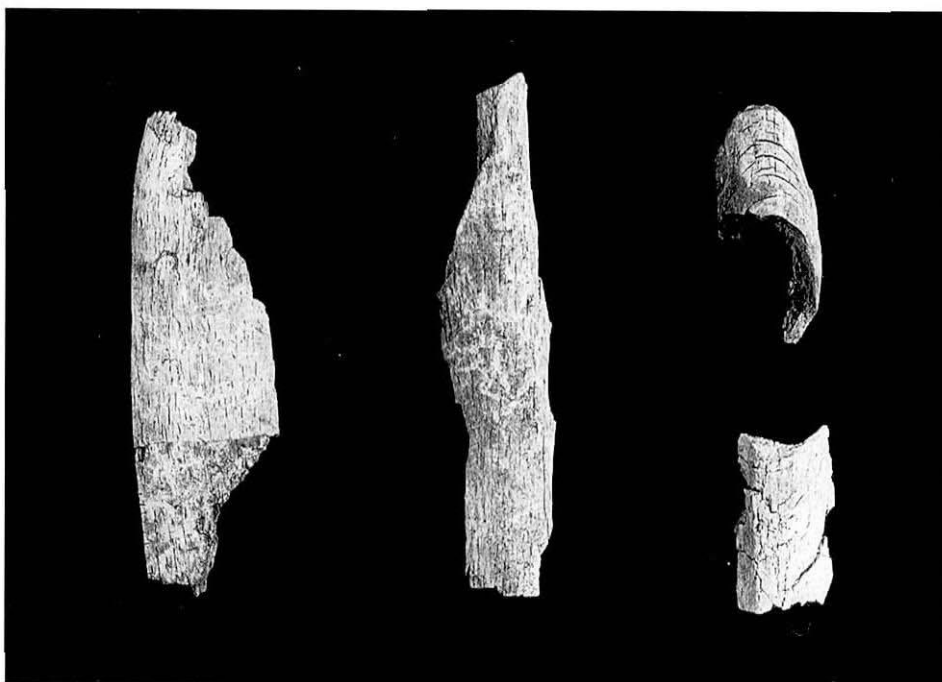


軸椎片・椎骨片（3面）

1号火葬墓出土人骨1



寬骨片 (3面)



下肢骨片 (3面)

1 号火葬墓出土人骨 2



付図 石勺遺跡J地点遺構配置図 (1/100)

報告書抄録

ふりがな	こくじゃくいせき							
書名	石勺遺跡Ⅳ							
副書名	J地点の調査							
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第56集							
編著者名	丸尾 博恵							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2丁目2-1 TEL 092-501-2211							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こくじゃくいせき 石勺遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 あけぼのまち 曙町			130°27'52"	33°31'57"	1998. 7.15 ～ 1998.12.20	1,619.56m ²	建物建替
所収遺跡名	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
石勺遺跡	墓地	奈良時代		火葬墓		須恵器 土師器		

大野城市文化財調査報告書

第56集

1999年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印刷 陽明印刷企業組合
福岡県春日市春日公園1-3